# 「南方隨筆」版

# 南方熊楠　「今昔物語の研究」

藪野直史オリジナル注附

［やぶちゃん注：本論考は「一」が大正二（一九一三）年八月、「二」が同年十一月、「三」が同年、最後の「四」が翌大正三年五月発行の『郷土研究』初出で、大正一五（一九二六）年五月に岡書院から刊行された単行本「南方隨筆」に収録された。

底本は同書初版本を国立国会図書館デジタルコレクションの原本画像（ここが冒頭）で視認して用いた。但し、加工データとしてサイト「私設万葉文庫」にある電子テクスト（底本は平凡社「南方熊楠全集」第二巻（南方閑話・南方随筆・続南方随筆）一九七一年刊で新字新仮名）を加工データとして使用させて戴くこととした。ここに御礼申し上げる。

疑問箇所は所持する平凡社「南方熊楠選集3」の「南方随筆」（新字新仮名）で校合した。同選集は本篇の初出の誤りが補正してあり、しかも原文はなく、元版全集編者による読み下し文となっている（しかし、それは現代仮名遣の気持ちの悪い代物であり、無論、漢字は新字体である）。今までもそうしてきたが、底本の原文通り、まず、底本の返り点のみのついた漢文（返り点のないものは白文）で示し（但し、返り点に誤りがあると認めた場合はそれを訂した）、その後に《　》で推定される訓読文を添えた。但し、私は可能な限り、引用原本を確認出来るものは、それで確認して誤りと判断し得たものは訂し、「選集」のみが拠り所となる場合でも、無批判の受け入れず、読みも私の我流で訓読し直してある。そうした部分は、実は甚だしく多くあるから、五月蠅くなるばかりなので、通常、その底本の誤りは、原則、注記しない。なお、原話の正確な部分を探すのに最も活用したのは「大蔵経データベース」である。

なお、本論考の参考に供するため、熊楠が採り上げている「今昔物語集」の当該話のうち、私が電子化（注）していない作品については、本電子化注に先立って、この私のブログ・カテゴリ『「今昔物語集」を読む』で事前に電子化訳注をしておいた。実際、その話と比較しながらでなければ、本論考は素人では全く歯が立たないと思われるからである。

なお、ブログでの本篇電子化注は「今昔物語集」の各話の論考の切れ目で分割して示したが、ここでも、それを踏襲し、長いものは、「選集」の段落を参考に、分割し、その段落末に注を挟んで、その後を一行空けた。各話間は二行空けた。

また、ブログ版ではかなりの読みを附したが、ここでは一部を除去して、ルビ化した。読みが判らぬ方は、ブログ版を見られると、附されてあるかも知れない。また、ブログ版では底本に従いつつ、難読と思われるものには、注挿入で読みを示したが、五月蠅いだけなので、ここでは、（　）を附してルビを振ってある。］

# 今昔物語の研究

## 一

今昔物語集巻四「羅漢比丘教國王太子死語第十二」《羅漢の比丘、國王太子の死を教へたる語第十二》の本話が芳賀博士の纂訂本に出て居らぬ。唯だ此話に縁の遠い史記の西門豹が河伯の爲に民の娘を川に沈むるを禁じた話を參看せよと有るのみだ。然し此話の出所は玄奘の西域記巻十二、達摩悉鐵帝國、昏馱多城、國之都也、中有二伽藍一、此國先王之所二建立一、疏レ崖奠レ谷式建二堂宇一、此國之先、未レ被二佛教一、但事二邪神一、數百年前、肇弘二法化一、初此國王愛子嬰レ疾、徒究二醫術一、有レ加無レ瘳、王乃躬往天祠、禮請求レ救、時彼主爲レ神下レ語、必當二痊復一、良無二他慮一、王聞喜慰、回駕而歸、路逢二沙門一、容止可レ觀、駭問二其形服一、問レ所二從至一、此沙門者、已證二聖果一、欲レ弘二佛法一故、此儀形、而報レ王曰、我如來弟子、所謂苾芻也、王既憂心、卽先問曰、我子嬰疾、生死未分、沙門曰、王先靈可レ起、愛子難濟《昏馱多城は國の都なり。中に伽藍有り、此の國の先王の建立する所なり。崖を疏し、谷を奠め、以つて堂宇を建つ。この國の先は［やぶちゃん注：この国はこれ以前に。］、未だ佛教を被けず、但だ、邪神に事ふ。數首年前、肇めて法化を弘む。初め、此の國王の愛子、疾ひに嬰る。徒に醫術を究め、加ふる有れども、瘳ゆること無し。王、乃ち、躬ら、天祠に往き、禮し、請ふて、救ひを求む。時に、彼の主［やぶちゃん注：神主。神官。］、神と爲りて語［やぶちゃん注：神託のお告げ。］を下して、「必ず、當に痊復すべし。良に他慮すること、無かれ。」と。王、聞きて、喜び、慰められ、駕を回らして歸る。路に沙門に逢ふ。容止［やぶちゃん注：姿や挙止（立ち居振る舞い）。］、觀るべし。その形服に駭きて、從つて至る所を問ふ。此の沙門、已に聖果を證し、佛法を弘めむと欲するが故に此の儀形あり。而して、王に報じて曰はく、「我れは如來の弟子、所謂、苾芻［やぶちゃん注：現代仮名遣「ひっしゅ」。比丘に同じ。］なり。」と。王、既に心に憂ふれば、卽ち、先づ、問ふて曰はく、「我が子は疾ひに嬰り、生死、未だ分かたず。」と。沙門曰はく、「王の先靈は起こすべきも、愛子は濟ひ難し。」と。》（是は、王の死んだ先祖の靈を復生らす術有りとも、王の愛子の死を救ふ方は無いと云ふ意なるを物語集の筆者解し損ねて、沙門答て云く、御子必ず死給ひなむとす、助け給はむに力不レ及ず《力及ばず》、是れ天皇の御靈の所爲也と譯し居る）。王曰、天神謂二其不レ死一、沙門言、其當レ終、詭レ俗之人言何可信。遲至二宮中一、愛子已死、匿不レ發喪、

更問神主、猶曰不レ死、疹疾當瘳、王便發怒、縛神主而數曰、汝曹群居、長レ惡妄行二威福一、我子已死、尙云當瘳、此而謬惑、孰不レ可レ忍、宜下戮神主一殄滅靈廟上、於レ是殺二神主、除二神像一、投二縛芻河一、迴駕而還、又遇二沙門一、見而敬悅、稽首謝曰、曩無二明導一、佇足邪途、澆弊雖久、沿革在レ茲、願能垂顧、降二臨居室一、沙門受レ請、隨至二中宮一、葬子既已、謂二沙門一曰、人世紜紛、生死流轉、我子嬰レ疾、問二其去留一、神而妄言、當二必痊差一、先承二指告一、果無二虛脫一、斯則其法可レ奉、唯垂二哀愍一、導二此迷徒一、遂請二沙門一、揆二度伽藍一、依二其規矩一而便建立、自レ爾之後、佛敎方隆云々、大精舍中有二石佛像一、像上懸二金銅圓蓋一、衆寶莊嚴、人有二旋繞一、蓋亦隨轉、人止蓋止、莫レ測二靈鑒一。聞二諸耆舊一曰、或云聖人願力所レ持、或謂機關祕術所レ致、觀二其堂宇一、石壁堅峻、考二厥衆議一、莫知實録。《『王曰はく、「天神、其れ、死せざるを謂ふ。」と。沙門曰はく、「其れ、當に終はるべし。俗を詭る人の言、何ぞ信ずべけんや。」と。遲く、宮中に至るに、愛子、已に死せり。匿して、喪を發せず。更に神主に問ふに、猶曰はく、「死せず。疹疾、當に瘳ゆべし。」と。王、便ち、怒りを發し、神主を縛りて數めて［やぶちゃん注：罪を數えて相手を責めて。］曰はく、「汝曹は群れ居りて、惡を長じ、妄りに威福を行なひ、我が子、已に死せるに、尙、『當に瘳ゆべし』と云ふ。此く、謬り惑はすは、孰んぞ忍ぶべからざらん。宜しく神主を戮し、靈廟を殄滅べし［やぶちゃん注：完全に殲滅せよ。］。」と。是に於いて、神主を殺し、神像を除き、縛芻河［やぶちゃん注：オクサス川。Oxus。中央アジアの大河川アムダリヤのラテン名。私の『「今昔物語集」卷第四「羅漢比丘敎國王太子死語第十二」』の注を參照。地図をリンクさせてある。］に投じ、駕を廻して歸る。又、沙門に遇ふ。見て、敬んで、悅び、稽首して謝して曰はく、「晨に、明導、無くば、足を邪まなる途に佇めしならん。弊を澆ること、久しと雖も、沿革は茲に在り［やぶちゃん注：「このような悪しき事態となったもとは我が国の歴史の信仰の誤りにこそある」の意か。］。願はくは、能く顧みを垂れ、居室［やぶちゃん注：この王国の宮廷。］に降臨されんことを。」と。沙門、請ひを受け、隨ひて中宮に至る。子を葬ること、既に已り、沙門に謂ひて曰はく、「人世は紜紛して、生死、流轉す。我が子、疾ひに嬰りて、其の去留を問ふに、神をして妄言するに。『當に必ず痊差ゆべし』とせり。先に指告を承くるに、果して、虛脫、無し。斯れ便ち、その法を奉ずべきなり。唯だ、哀愍みを垂れて、此の迷徒を導け。」と。遂に、沙門に請ひて、伽藍を揆度り［やぶちゃん注：全体を見渡して推し量って。］、其の規矩に依りて、便ち、建立す。爾れより後、佛法、方に盛んとなる』云々。『伽藍の大精舍中、石佛像、有り。像の上に、金銅の圓蓋を懸け、衆くの寶もて、莊嚴す。人、旋り繞るもの有れば、蓋も亦、隨ひて轉る。人、止まれば、蓋も、止まり、靈鑒［やぶちゃん注：霊の鏡としてのあらたかなる験し。］、測ること、莫し。諸れを耆舊［やぶちゃん

注：現代仮名遣「ぎきゅう」。昔馴染みの老人。」に聞くに、曰はく、或いは、云はく、「聖人の願力の持する所なり。」と。或いは謂はく、「機關の祕術の致す所なり。」と。其の堂宇を觀るに、石壁は竪峻なり。厥の衆議を考ふるに、實錄を知るもの莫し」。》、慈恩傳卷五には、昏馱多城中有二伽藍一、此國先王所レ立、伽藍中石佛像上有二金銅圓蓋一、雜寶裝瑩、自然住レ空、當二於佛頂一、人有二禮旋一、蓋亦隨轉、人停蓋止、莫レ測二其靈一《昏馱多城中に、伽藍、有り。此の國の先王の立つる所なり。伽藍中の石の佛像の上に、金銅の圓蓋有り。雜寶、莊く瑩き、自然と、空に住りて、佛頂に當たる。人、禮して、旋れば、蓋も亦、隨ひて轉る。人、停まれば、蓋も、止まる。其の靈、測る莫し。》とばかりあって縁起を説て無い（一九〇六年板「ビール」英譯西域記二の二九三頁と一九一一年板同氏譯玄奘傳一九七頁をも併せ見よ）。

［やぶちゃん注：**以上で熊楠が採り上げている話は、こちらで電子化訳注してある。**

「芳賀博士の纂訂本」国文学者芳賀矢一「攷証今昔物語集」で、国立国会図書館デジタルコレクションで大正二年から十年にかけて冨山房から刊行したそれが読める。**彼の批判した当該部は、ここと次のページ**である。「やたがらすナビ」で同芳賀校訂本の本文だけがここに電子化されてある。但し、全然パンチが弱い新字である。私の上記の正字正仮名版を強くお薦めする。

「史記の西門豹が河伯の爲に民の娘を川に沈むるを禁じた話を參看せよ」**前注で示した話をただ活字にしただけの最後に、『（本書卷十第三十三條立生贄國王止此平國語參閲）』とだけあるのを指す。**この標題は、「生贄を立つるに、國の王、此れを止めて國を平る語」と読む（「やたがらすナビ」のこちらで電子化された読み易いものが視認出来る。但し、新字である）。その指示するのは、ここにある「〇史記卷百二十六滑稽傳」のそれなのであるが、**この話、私が読んでも、こちらの話とはひどく異なっており、原拠であるどころか、類話でさえない、おかしな「見よ注記」と言わざるを得ぬ。熊楠の不満げな批判的物言いは頗る正当と言える。正直、芳賀は「源氏物語」を『乱倫の書物』と誹謗し、「こんなものが日本の大古典であることは情けない」と言い放って何とも思わないガチガチな常識人だった。されば、正直、優れた稗史で、時にエロティックで滑稽な「今昔物語集」を、これ、正当に評価・校訂するに相応しい学者だったとは、私は全く以って思わないと述べておく。**

「慈恩傳」「大慈恩寺三藏法師傳」玄奘（六〇二年～六六四年）の伝記。全十巻。唐の慧立の編になる。

『「ビール」英譯西域記』イギリスの東洋学者で、最初に初期仏教の記録類を中国語から直接翻訳したサムエル・ビール（Samuel Beal　一八二五年～一八八九年）。よく判らないが、死後の一九一一年刊の“*The Life of Hiuen-Tsiang*”（「玄奘の生涯」）辺りに含まれるか。

「Internet archive」のこちらに一九一四年版があるが、版が孰れも違うので、流石に探す気にはならない。悪しからず。]

○物語集巻四天竺二人於二海中一値二惡龍一人依二比丘教一免レ害語第十三《天竺の人、海中にて惡龍に値へる人、比丘の教へにより、害を免れる語第十三［やぶちゃん注：私の原文訳注はこちら。］》は三國傳記に出た同話異文を芳賀博士は引て居るが、此話の根本を擧て居らぬ。其根本話は、比丘道略集羅什譯、衆經撰雜譬喩經下に、昔有二屠兒一、欲供二養道人一、以二其惡一故、而無二往者一、後見二一新學沙門威儀詳序一、請歸飯二食種種餚饌一、食訖還請二此道人一、願終身在二我家一食、道人卽便受レ之、玩習既久、切見下在二其前一殺生上、不二敢呵一レ之、積有二年歳一、後屠兒父死、作二河中鬼一、以レ刀割レ身、卽復還、復道人渡レ河、鬼捉レ船曰、沒二此道人一著二河中一、乃可レ得レ去、船人怖曰、鬼言、吾家昔日供二養此道人一、積年不レ呵二我殺生一、今受二此殃一、恚故欲耳、船人曰、殺生尙受二此殃一、況乎道人、鬼曰、我知レ爾、恚故耳、若能爲レ我布施、作レ福呼レ名呪願、我便相放、船人盡許二爲作一レ福、鬼便放之、道人卽爲レ鬼作レ會、呼レ名呪願、餘人次復爲作レ會、詣二河中一、呼レ鬼曰、卿得レ福未、鬼曰卽得、無二復苦痛一、船人曰、明日當二爲卿作一レ福、得二自來一不、鬼曰得耳、鬼旦化作二婆羅門像一來、手自供養、自受二呪願一、上座爲說經、鬼卽得二須陀洹道一、歡喜而去、是以主客之宜、理有二諫正一、雖レ墮二惡道一、故有二善緣一、可レ謂二善知識一者是大因緣也《昔、屠兒［やぶちゃん注：家畜などの獣類を殺すことを生業とした人。ひどく差別されたことはご存知の通り。以下の「惡なるを……」以下はその殺生の故である。］、有り、道人を供養せん［やぶちゃん注：自身の殺生の業を供養して貫うために僧に布施をしたいと思ったのである。］と欲す。その惡なるを以つての故に、往く者、無し。後、一の新學の沙門の、威儀、詳序なる［やぶちゃん注：述べ語る内容が非常に詳しかったのを。］を見て、請ひ歸りて、種種の餚饌［やぶちゃん注：豪華な料理。御馳走。］を飯食はせしめ、食ひ訖りて還た、此の道人に請ひて、「願はくは、終身、我が家に在りて食せんことを。」と。道人、卽ち、之れを受く。玩習むこと、既に久しくして、切りに、其の前に在りて殺生せるを見るも、敢へて之れを呵めず。積もりて、年歳、有り。後、屠兒の父、死し、河の中の鬼となり、刀を以つて、身を割き、乃ち、復た、還る。後、道人、河を渡るに、鬼、船を捉へて曰はく、「此の道人を沒して、河中に著かば、乃ち去るを得べし。」と。船人、怖れ、白す［やぶちゃん注：その訳を尋ねたの意であろう。］。鬼の言く、「吾が家、昔日、此の道人を供養す。積年、吾が殺生を呵めず、今、此の殃ひを受く。恚むが故に殺すのみ。」と。船人曰はく、「殺生すら、尙ほ、此の殃ひを受く、況んや、道人を

や。」と。鬼曰はく、「我れ、爾れ［やぶちゃん注：その僧がこの船に乘っていることであろう。］を知るは、恚むが故のみ。若し、能く我が爲めに布施して、福を作し、名を呼びて、呪願せば、我れ、便ち、相ひ放さん。」と。船人、盡く、爲めに、福を作さんことを許けり。鬼、便ち、之れを放つ［やぶちゃん注：船が普通に航行出来るように放した。］。道人、卽ち、鬼の爲めに會を作し、名を呼びて、呪願す。餘人［やぶちゃん注：同船している他の乘客。］も、次に、復た、爲めに會を作し、河中に詣り、鬼を呼びて曰はく、「卿［やぶちゃん注：尊敬の二人称。］、福を得しや、未だしや。」と。鬼曰はく、「卽ち、得たり、復た、苦痛、無し。」と。船人曰はく、「明日、當に卿のた爲めに福を作すべし。自ら來たるを、得るや不や。」と。鬼曰く、「得。」と。鬼、旦に化して、婆羅門の像と作りて、來たり、手ずから、供養し、自ら、呪願を受く。上座［やぶちゃん注：高位の僧。ここはかの僧侶を指す。］、爲めに、說經す。鬼、卽ち、須陀洹道［やぶちゃん注：サンスクリット語の「流れに從って与かる者」の意の「スローターパンナ」の漢音写。煩悩を脱して聖者の境地に入った位を得ることを言う。四果の第一。］を得、歡喜して去る。是を以つて主・客の宜には、理として諫正すること有るべきなり。惡道に墮つと雖も、故は、善緣、有り。善知識と謂ふべき者は、是れ、大因緣なり。》、次に、昔有二賈客一、入レ海採レ寶、逢二大龍神一、擧レ船欲レ飜、諸人恐怖、龍曰、汝等頗遊二行彼國一不、報言、曾行過レ之、龍與二一大卵一、如二五升瓶一、汝持二此卵一、埋二彼國市中大樹下一、若不レ爾者、後當レ殺レ汝、其人許レ之、後過二彼國一、埋レ卵著二市中大樹下一、從レ是以後、國多二災疾疫氣一、國王召二道術一占レ之、云有二蟒卵一在二國中一、故令レ有二災疫一、輒推掘燒レ之、病悉除愈、賈客人後入レ海、故見二龍神一、重問事狀、賈人曰、昔如二神敎一、埋二卵市中一、國中多有二疾疫一。王召二梵志一占レ之、推得焚燒、病者悉除、神曰、恨不レ殺二奴輩一、船人問、神何故乃爾也、神曰、卿曾聞三某國有二健兒某甲一不、曰、聞レ之、已終亡矣、神曰、我是也、我平存時、喜陵二擽國中人民一、初無下敎二呵我一者上、但奬レ我、使三我墮二蟒蛇中一、悉欲レ盡レ殺レ之耳、是以人當二相諫從レ善相順一。莫下自恃二勢力一、陵二擽於人一、坐招中其患上、三惡道苦、但可レ聞レ聲、不レ可二形處一《昔、賈客［やぶちゃん注：商人。］有り、海に入りて寶を採る。大龍神の、船を擧げて、飜へさんと欲るに逢ふ。諸人、恐怖す。龍曰はく、「汝ら、頗る彼の國に遊行するや不や。」と。報へて曰はく、「曾つて行き、之れを過ぎるなり。」と。龍、一つの大きなる卵の、五升瓶のごときを與へ、「汝、此の卵を持ちて、彼の國の市中の大樹の下に埋めよ。若し爾せずんば、後に汝を殺すべし。」と。其の人、之れを許す。後、彼の國を過ぎり、卵を埋むるに、市中の大樹下に著けり。是れより以後、國に、災ひ・疫疾の氣、多し。國王、道術を召して、之れを占ふ。云はく、「蟒の卵、國の中に在り、故に災ひ・疫を有らしむ。」と。輒ち、推ねて、掘り、之れを燒くに、病ひ、悉く、除か

れ、愈えたり。賈客の人、後、海に入りて、故に龍神に見ゆ。重ねて事狀を問ふ。賈人曰はく、「昔、神の教へしごとく、卵を市中に埋むるに、國中、多く、疾疫あり。王、梵志［やぶちゃん注：「ぼんし」とも。バラモン教の僧を指す語。］を召して、之れを占ひ、推ねて、焚-燒ひ、病む者、悉く除ゆ。」と。神曰く、「恨むらくは、奴輩を殺さざるを。」と。船人、問ふ、「神は何故に、乃ち爾するや。」と。神曰はく、「卿、曾つて、某國に健兒の某-甲の有りを聞けるや不や。」と。曰はく、「之れを聞けど、已に終-亡れり。」と。神曰はく、「我れは、是れなり。我れ、平-存りし時、喜みて、國中の人民を陵-擽るに、初めより、我れを、教え、呵むる者、無く、但だ、我れに奬め、我れをして蟒-蛇の中に墮とせしむ。悉く、之れを殺し盡くさんと欲するのみ。」と。是れを以つて、人は、當に相ひ諫め、善に從ひてぞ、相ひ順ぐべし。自ら勢力を恃んで、人を陵-擽り、坐りて、其の患を招くこと莫かれ。三惡道は苦し。但だ聲は聞くべくも、形、處るべからず」と》、此の二つの相似た談が、此經に相雙んで出て居るを見て、作合わせて今昔の四の十三語［やぶちゃん注：「のこと」と訓じておく。］を生じたのだらう、東晉の譯ならんてふ佛說目連問戒律中五百輕重事經には、龍の舊師が免る可からざるを知て、自ら進んで水に投じて死んだとして云く、昔迦葉佛時、有二一比丘一、度二弟子一不レ教レ誡、弟子多作二非法一、命終生二龍中一、龍法七日一受レ對時、火燒二其身一、肉盡骨在、尋復還復、復則復燒、不レ能レ堪レ苦、便自思惟、我宿何罪、致二苦如レ此一耶、便觀二宿命一、自見本作二沙門一、不レ持二禁戒一、師亦不レ教、便作二毒念一、恚二其本師一、念二欲傷害一、會後其師、與二五百人一、乘レ船渡レ海、龍便出レ水捉レ船、衆人卽問、汝爲是誰、答我是龍、問汝何以捉レ船、答汝若下二此比丘一、放レ汝使レ去、問此比丘何豫二汝事一、都不レ索二餘人一、獨索二此比丘一者何、龍曰、此比丘、本是我師、不レ教二誡我一、使下我今日受中如レ此苦痛上、是以索レ之、衆人事不レ得レ止、便欲下捉二此比丘一下著中水中下、比丘曰、我自入レ水、不レ須レ見レ捉、卽便投レ水喪二身命一滅、以レ此驗レ之、度レ人事大不レ可レ不二教誡一《昔、迦葉佛の時、一比丘有り、弟子を、度して教戒せず、多く、非法を作す。命、終へて、龍の中に生まる。龍の法、七日に一たび、對を受くる時、火、其の身を燒き、肉、盡きて、骨、在り。尋で、復た、還り、復た、則ち、復た、燒かれ、苦しみに堪ふ能はず。便ち、自ら思惟して、「我れ、宿、何の罪ありてか、此くのごとき苦しみを致すや。」と。便ち、宿命を觀ずるに、自ら見して、「本、沙門と作りて、禁戒を持せず、師も亦、教へざりき。」と。便ち、毒念を作し、その本師を恚み、「傷害せん。」と念欲す。會ま、後、其の師、五百人と、船に乘り、海を渡る。龍、便ち、水を出でて、船を捉ふ。衆人、卽ち、問ふ、「汝は、是れ、誰と爲すや。」と。答へて、「我れは、是れ、龍なり。」と。問ふ、「汝、何を以つてか船を捉ふるや。」と。答へて、「汝、若し、此の比丘を下ろさば、汝を放ちて去らしめん。」と。問ふ、「この比丘、何ぞ、

汝の事に豫(あづか)るや。都(すべ)て、餘人を索(もと)めずして、獨り、此の比丘のみを索むるは、何ぞや。」と。龍曰はく、「此の比丘、本、是れ、我が師なり。我れを教戒せず、我をして、今日(こんにち)、此くのごとく苦痛を受けせしむ。是れを以つて、之れを索む。」と。衆人、事(こと)やむを得ずして、便ち、此の比丘を捉へて、水中に著(お)かんと欲す。比丘曰わく、「我れ、自ら、水に入らん。須(すべ)らく捉らへらるべからず。」と。卽ち、便ち、水に投じ、身命を喪ひて、滅す。此れを以つて、之れを驗(み)れば、人を度するに、教戒せざるべからず。》。［やぶちゃん注：以上の「佛說目連問戒律中五百輕重事經」については、熊楠の引用文には、かなりの有意な原本からの脱落部が存在し、返り点の位置もどうも妙なところがある。これでは正常に読むことが出来ないので、「大蔵経データベース」の当該部を、丸々、本文では引用した。実際の底本「南方隨筆」所収の本文（右ページ一行目から次のページの三行目まで）とは大きく異なるので、必ず、対照して読まれたい。なお、「南方隨筆」ではこのパートはここで終わっているのであるが、恐らくは初出の大正二（一九一三）年八月発行の『鄉土研究』初出に拠ったものと思われる「選集」版では、以下の一段落が存在する。新字新仮名である上に、南方熊楠による表記を恣意的に弄っている。しかし、『鄉土研究』の当該号はネットでは見られないことから、その「選集」版を、ここまでの電子化で覚えた熊楠の表記癖に直して、以下に参考までに掲げておく。特殊な仕儀なので注意されたい。読みは筑摩書房「全集」版（筑摩「選集」版の底本）編者によって添えられた可能性が頗る高いが、総て歴史的仮名遣に従って残しておいた。或いは、ここも初出は総て漢文なのかも知れないと考え、「大蔵経データベース」で当該部を確認出来たので、一部の漢字を正字化し、また、句点を読点に代えて、今までのように本文にぶち込んで、訓読部を《　》後に置いた。但し、返り点は無しの白文にしておいた。この仕儀で、少なくとも「選集」版のそれよりも遙かに原形に近いものを復元出来たかも知れぬと、ちょいとばかり、自負している。］

＊

又東晉頃の譯本ちふ阿育王譬喩經には平素豕(ぶた)を殺した者恆水(ガンジスがは)の鬼と也、曾て豕を殺すを諫めなんだ道人を捉り殺さうと爲たとし、云く、昔有賢者、居舍衞國東南三十里、家門奉法供養道人、家公好喜殺猪賣肉、道人漸漸知之、未及呵誡。老公遂便命終、在恒水中受鬼神形云々、後日道人渡恒水、在正與鬼神相値、其鬼便出半身在水上、捉船顧言、捉道人著水中、不者盡殺船上人、時有一賢者便問鬼神、何以故索是道人、鬼神言、我在世間時供養道人、道人心知我殺猪賣肉、而不呵誡我、是以殺道人耳、賢者便言、君坐殺猪乃致此罪、今復欲殺道人、罪豈不多乎、鬼神思惟、實如賢者之言、便放令去、道人得去、還語其家、子孫爲作追福、神卽得免苦、示語後世人、道人受供養不可不教誡時《『昔、賢者、有り、舍衞國の東南三十里に居れり。家内、法を奉じ、道人に供養す。家公、好-喜(この)みて猪(ぶた)を殺し、

肉を賣れり。道人、漸々う、之れを知れども、未だ呵め誡むるに及ばず。老公、遂に便ち、命、終へ、恆水の中にあって鬼神の形を受く』云々。『後日、道人、恒水を渡り、正に鬼神と相ひ値ふ。其の鬼、便ち、半身を出だして水上に在り、船を捉へて顧みて言はく、「道人を捉へて水中に著け。不者んば、盡く、船上の人を、殺さん。」と。時に、一賢者、有り、便ち、鬼神に問ひて、「何を以つての故に是の道人を索むるや。」と。鬼神、言はく、「我れ、世間に在りし時、道人を供養す。道人、心には、我れ、豚を殺し、肉を賣るを知れり。而れども、我れを、呵め誡めず。是を以つて、道人を殺すのみ。」と。賢者、便ち、言はく、「君、豚を殺せしに坐りて、乃ち、此の罪を致す。今、復た、道人を殺さんと欲す。罪、豈多からざらんや。」と。鬼神、思惟するに、「實に。賢者の言のごとし。」と。便ち、放して去らしめ、道人、去るを得たり。還りて、其の家に語り、子孫の爲めに、追福を作す。神、卽ち、苦しみを免るるを得たり。後世の人に示す。「道人、供養を受くれば、敎へ誡めざるべからず。」と。』。》。

＊］

［やぶちゃん注：以下で熊楠が採り上げた当該話は『「南方隨筆」版　南方熊楠「牛王の名義と烏の俗信」　オリジナル注附　「一」の（1）』の注の中で電子化注してある（「今昔物語四に靂旦國王前に阿竭陀藥來る話あり」に対する私の注）ので、まず、それを読まれたい。今回、再度、原文本文を校訂しておいた。］

○物語集巻四の震旦國王前、阿竭陀藥來語第卅二《震旦の國王の前に、阿竭陀藥、來たれる語第三十二》は、徒然草に見えた、土大根を萬にいみじき藥とて、毎朝二つ宛燒て食た筑紫の某押領使の急難の時、大根が二人の兵と現じて、敵を擊ち卻けた話に較似て居るが、芳賀博士と同樣、予も其出處を見出し居らぬ。但し阿竭陀藥其物については多少調べたから、此物語研究者の參考迄に書て置く。翔譯名義集九に、阿伽陀は普く去るの意で、一切の病を去る故名く、華嚴に、此藥を見さえすると、衆病悉く除くと有ると見ゆ、唐の菩提流志譯不空羂索神變眞言經卷廿一に、如意阿伽陀藥品有り、餘り長いから爰に引き得ぬが、此藥は種々の病のみならず、王難（虐王に困しめらるゝ事）賊難、虎狼水火刀杖等の難を避け、諍論に勝ち、人民に敬はれ、壽を長くし、一切の神をして護らしめ、一切鬼魔に害されぬとてふ無類の效驗有りとて、之を調合する藥劑の名を擧て居るが、梵語許りで分らぬものが多い。且つ加持の祕法が却々込入た者で、一寸行ひ難い樣だ。但し此品に製法を出たのは、大無勝寶阿伽陀首と名け、所有諸法悉無二過者一《所有諸法、悉く過ぐる者、無し。》と有るから、此外に劣等の阿伽陀藥も色々有つたらしい。北凉譯大

般涅槃經十二に、摩羅毒蛇に螫（さす）るゝと［やぶちゃん注：その毒牙に刺されると。］、どんな呪も藥も效ぬが、阿竭多星の呪のみ之を除愈すと有るを見ると、阿竭陀又阿伽陀は、本と星の名で、專ら療病を司つた星らしい。

［やぶちゃん注：「徒然草に見えた、土大根を萬にいみじき藥とて、毎朝二つ宛燒て食た筑紫の某押領使の急難の時、大根が二人の兵と現じて、敵を擊ち卻けた話」第六十八段の大根好きの男の不思議な話で、同書の中では、唯一と言ってもいい、怪奇談である。以下に示「怪談老の杖　電子化注　始動　／　序・目次・卷之一　杖の靈異」の私の注で全電子化をしてあるので參照されたい。

「芳賀博士と同樣、予も其出處を見出し居らぬ」ここ。但し、本文の活字化だけで、典拠への言及は全くない。

「摩羅毒蛇」不詳。こう書くからには、実在する毒蛇に比定されていなければおかしい。大きいため、注入される毒液が多く、咬まれると、非常に危険な爬虫綱有鱗目ヘビ亜目コブラ科キングコブラ属キングコブラ *Ophiophagus hannah* か。インド東部・インドネシア・カンボジア・タイ・中国南部・ネパール・バングラデシュ・フィリピン・ベトナム・マレーシア・ミャンマー・ラオスに棲息する。」

［やぶちゃん注：熊楠が採り上げた当該話はこちらで電子化訳注してあるので、まず、それを読まれたい。底本ではここから。］

○今昔物語集卷十、聖人犯后蒙國王咎成天狗語第卅四《聖人（しやうにん）、后（きさき）を犯して、國王の咎（とが）を蒙りて、天狗と成る語（こと）第三十四》は、今度出版の芳賀博士の攷證本に出所も類話も出て居らぬ。或は其處こに示された卷廿、染殿后爲三天宮被二嬈亂一語《染殿（そめどの）の后、天宮（てんぐ）の爲に嬈亂（ねうらん）せらるる語》の所が出たら、載て居るかと思ふが、一寸管見を記すと、趙宋の法賢譯瑜伽大教王經三に、不動尊大忿怒明王の眞言を法通り持誦すれば、能く諸童女を鉤召し、種々所欲の事を成す、唐の金剛菩提三藏が譯せる不動使者陀羅尼祕密法、矜羯羅（＝宮迦羅）を招く法を載す、矜者問事也、羯邏者驅使也、若不レ現者、心決定、念二誦不動使者一、必須レ得レ見、莫レ生二狐疑一、直至二平明一、無二不レ來者一、現已種種驅使、處分皆得、乃至洗レ手、或用二柳枝一令レ取、皆得、欲レ得二上レ天入一レ山、亦扶二行人一將去、欲レ得下見二欲界上天女等一、令二將來一相見上、亦得、何況人間、取二人及物、乃至種種飲食一、此神作二小童子形一、有二兩種一、一名二矜羯邏一、恭敬小心者是、一名二制吒迦一、難二共語一、惡性者是、猶如二人間惡性一、在レ下雖レ受二驅使一、常多二過失一也云々《「矜」（こん）とは「事を問ふ」なり、「羯羅」（がら）とは「驅使」なり。若し現ぜざれば、心、決定（けつぢやう）して、不動使者を念誦す。必

ず須らく見ることを得べし。狐疑を生ずる莫かれ。直ちに平明に至れば、來たらざる者、無し。現じ已りて、種種に驅使すれば、處分［やぶちゃん注：命令。］せること、皆、得。乃至は手を洗ひ、或いは柳枝を用ひんとするに、取らしむれば、皆、得。天に上り、山に入ることを得んと欲せば、又、行く人を扶けて將て去く。欲界上の天女等を見ることを得んと欲せば、將て來たらしめて相見んこと、亦、得たり。何ぞ況んや、人間にて、人及び物、乃至、種種の飲食を至らすことをや。此の神、小童子の形を作し、兩種、有り。一は「矜羯羅」と名づく。恭敬にして、小心なる者は、是れなり。一は制吒迦と名づく。共に語り難くして［やぶちゃん注：会話が上手く交わせず。］、惡性なる者は、是れなり。猶ほ、人間の惡性のごとし。下に在りて驅使を受くと雖も、常に過失多し云々》、唐の李無諂譯不空羂索陀羅尼經にも、此二童子を使ふ法を記す、唐の不空譯大寶廣博祕密陀羅尼經中卷に、隨心陀羅尼を五萬遍誦すれば、娵女や王后などを鉤召し得と有り、趙宋の法天譯金剛手菩薩降伏一切部多大教王經上に、部多女を眞言で招き妹となし、千由旬内に所要の女人を卽時取り來たらしむることを載す。矜羯羅も天女をすら取來る程だから、王后位はお茶の子だらう、斯る迷信が今日の歐州にも隱れ行なはるゝは、例せば、米人「リーランド」の巫蠱經（一八九九年板三五頁）に、今もイタリアに月神「チアナ」を祀る者、自分が望む貴族女をして犬形に變じ、萬事を忘失して其家に來り、忽ち元の女と成て其思ひを晴させ、復た犬と成て自宅へ還ると、本來の女と成るが、何を他人の家でされたか一向覺えず、若くは夢程に微かに覺えしむる呪法を載て居る。又今日も「タナ」女神を念じて、睡れる男女と情交を遂る誦言を出して居る。

［やぶちゃん注：「今度出版の芳賀博士の攷證本に出所も類語も出て居らぬ」ここ。但し、最後に『（本書卷二十染殿后爲天宮被嬈亂語參閲）』とある。次注參照。

「或は其處に示された卷廿、染殿后爲三天宮被二嬈亂一語」（正しくは最後に「第七」が附くのが正しい標題である）「の所が出たら、載て居るかと思ふが」この記事（「一」パート）は大正二（一九一三）年八月号『鄉土研究』であるから、芳賀矢一の「攷証今昔物語集」の同巻を載せた「中」は翌三年の刊行で未刊であったことによる。さて。では！ 大きな期待を持って見てみましょうかね！ あらま！ 残念ですねえ！ 「拾遺往生傳卷下相應傳（抄）」・「古事談第三僧行篇」・「宇治拾遺物語卷十五相應和尙上二都卒天一事付染殿の后奉レ祈事」と並べて、『（元亨釋書卷十感進篇相應傳參閲）』とあるだけですねえ。これって、同事件の話の同時代或いは近未来の並列のリストに過ぎませんぜ。最後のが気になるって？ いやいや、国立国会図書館デジタルコレクションの写本画像で見ますか？ 染殿の「狂疾」を修法したことが書いてあるだけですぜ。熊楠先生のように、漢籍経典をちっともディグしてないじゃねぇか。ダメだ、こりゃ！ なお、この篇は『「今昔物語集」卷第二十「染殿后爲

天宮被嬈亂語第七」（R指定）』で電子化訳注しておいた。但し、かなり猥褻な描写が出るので、ご注意あれ。

「鉤召」歴史的仮名遣「こうせう」。現代仮名遣「こうしょう」。実は底本は「釣召」だが、「選集」で訂した。密教に於ける護摩法の一種である「鉤召法」のこと。諸尊・善神、及び、自分の愛する者を召し集めるための修法。

「矜羯羅（＝宮迦羅）」前者は「こんがら」、後者は「くがら」と読む。サンスクリット語の「キンカラ」の漢音写で、「キン」は同語の疑問詞でそれに「矜」と当て、「作為」の意を持つ「カラ」に「羯羅」を当てて合成した語。「何をなすべきかを問い、その命令の通りに動く」という意であるという。奴僕や従者を指す一般名詞であるが、ここは不動三尊において制多迦童子（せいたか）とともにに不動明王の脇侍を務める矜羯羅童子を指す（通常の像作では不動明王の左脇侍（向かって右）に配される。十五歳ほどの童子の姿をしており、蓮華冠をつけ、肌は白肉色、合掌した親指と人差し指の間に独鈷杵を挟んで持つ。天衣と袈裟を身に着けている（ウィキの「矜羯羅童子」に拠った）。脇侍としては超弩級に私の好きな二人である。

「娵女」「うねめ」は古代の宮中で食膳などに奉仕した女官。

「部多女（ヴェータラ）」「屍鬼」と漢訳するインドの妖怪。死体に取り憑いてこれを生きているかのように活動させる鬼神。色が黒く、背丈が高く、首は駱駝、顔は象、脚は牡牛、眼は梟、耳は驢馬のようであるとされる。

「千由旬内」七千キロから一万四千キロ四方。

『米人「リーランド」の巫蠱經（一八九九年板三五頁）』「選集」では書名に『アラジヤ』とルビされてある。これは、アメリカの作家で民俗学者であったチャールズ・ゴッドフリー・リーランド（一八二四年～一九〇三年：フィラデルフィア出身。はプリンストン大学とヨーロッパで教育を受けた。ジャーナリズムに携わり、広い範囲を旅して、民俗学や民俗言語学に関心を抱き、アメリカとヨーロッパの言語や、民間伝承に関する書籍や記事を出版した）。一八九九年に書かれた「アラディア、或いは魔女の福音」（*Aradia, or the Gospel of the Witches*）。「Internet archive」のこちらで、原本の当該部が読める。それを見ると、何のことはない、思った通り、「チアナ」（「選集」では『ヂアナ』とする）は知られた「*Diana*」である。以下の、『今日も「タナ」女神を念じて、睡れる男女と情交を遂る誦言を出して居る』というのも次のページ当たりのそれと感じられ、されば、「タナ」（「選集」も同じ）もこれが「ディアナ」「ダイアナ」のことであろう。」

［やぶちゃん注：。熊楠が採り上げた当該話はこちらで電子化訳注してあるので、まず、それを読まれたい。底本ではここから。］

○物語同卷、國王造二百丈石卒堵婆一擬レ殺レ工語第卅五」《國王、百丈の石の卒堵婆を造りて、工を殺さんと擬る語第三十五》も、芳賀博士は出所を擧げ居らぬが、是は羅什譯、馬鳴菩薩の大莊嚴經論卷十五に見ゆ、云く、我昔曾聞、有二一國一、中施二設石柱一、極爲二高大一、除二去梯蹬一、櫨櫨繩索、置二彼工匠一、在二於柱頭一、何以故、彼若存活、或更餘處造二立石柱一、使レ勝二於此一、時彼石匠親族宗眷、於二其夜中一、集二聚柱邊一、而語之言、汝今云何、可レ得レ下耶、爾時石匠多二諸方便一、卽擿二衣縷一、垂二二縷線一、至二於柱下一、其諸宗眷、尋以二麁線一、繫二彼衣縷一、匠卽挽取、既至二於上一、手捉二麁線一語二諸親族一、汝等今者、更可レ繫二著小麁繩索一、彼諸親族、卽隨二其語一、如レ是展轉、最後得レ繫二麁大繩索一、爾時石匠、尋レ繩來下《我れ、昔、曾て聞く、一國有り、中に石柱を施設し、極めて高大と爲す。梯磴［やぶちゃん注：足場。］・櫨櫨［やぶちゃん注：滑車。］・繩索を除き去り、彼の工匠を置きて、柱頭に在らす。何を以つての故か。「彼、若し存活らせば、或いは更に餘處に石柱を造立し、此れに勝らしめんに。」となり。時に、彼の石匠の親族・宗眷［やぶちゃん注：一族の者。］、其の夜中に於いて柱の邊りに集ひ聚まる。而して、之れを語りて言はく、「汝ぞ、今、何をか云はんや。下るを得べきものか。」と。爾の時、石匠、諸の方便を多くせり［やぶちゃん注：「いろいろな降りる工夫を、沢山、考えた。」の意か。］。卽ち、衣縷［やぶちゃん注：着ている破れた着物。］を擿きて、二縷の線を垂らし、柱の下に至らす。其の諸宗眷、尋いで［やぶちゃん注：次に。］、麁き線を以つて彼の衣縷に繫ぐ。匠、卽ち、挽きて取り、既に上に至れば、手に麁き線を捉へ、諸親族に語らふに、「汝ら、今は、更に小しく麁き繩索を繫ぎ著むべし。」と。彼の諸親族、卽ち、其の語に隨ひ、是くのごとく、展轉して、最後に、麁き大きなる繩索を繫ぎ得たり。爾の時、石匠、繩を尋ひて來たり下れり。》、石柱は生死、梯磴櫨櫨は過去佛已滅言抔と、くだくだしく佛敎に宛てゝ喩を說き居る所を見ると、佛敎前から行れ居た物語らしい。

（大正二年八鄕研第一卷第六號）

［やぶちゃん注：「芳賀博士は出所を擧げ居らぬ」ここ。本文のみ。

「石柱は生死、梯磴櫨櫨は過去佛已滅言抔と、くだくだしく佛敎に宛てゝ喩を說き居る」「大蔵経データベース」で見ると、この話を記した後に、以下のように評釈されてあることを指す。

＊

言石柱者喩於生死。梯蹬櫨櫨喩過去佛已滅之法。言親族者喩聲聞衆。言衣縷者喩過去佛定之與慧。言擿衣者喩觀欲過去味等法。縷從上下者喩於信心。繫麁縷者喩近善友得於多聞。

細繩者多聞縷復懸持戒縷。持戒縷懸禪定縷。禪定縷懸智慧繩。以是麁繩堅牢繫者喩縛生死。
從上下者喩下生死柱。

以信爲縷線　多聞及持戒
猶如彼麁縷　戒定爲小繩
智慧爲麁繩　生死柱來下

＊

これまた、壮大な仏教原理で、この事件の内容を解説した上、偈まであって、あたかも宋代の僧無門慧開の「無門關」の一篇を見るような、公案的ブットビの様相を呈しているのは、私などは、思わず、ニンマリしてしまった。因みにリンク先は私の古い電子化物で野狐禪全訳附きである。にしても、**熊楠の、原型は仏教以前とするその指摘は頗る鋭い。**」

## 二

［やぶちゃん注：熊楠が採り上げた当該話はこちらで電子化訳注してあるので、まず、それを読まれたい。底本ではここから。］

○百濟河成（鄉研一の五〇と一六六頁）が寫生に巧だつたのは、此人が死んだ年から纔か廿五年後に成た文德實錄五に、所寫古人眞、及山水草木等、皆如二自生一、昔在宮中、令三或人喚二從者一、或人辭以レ未レ見二顏容一、河成卽取二一紙一圖二形體一其、或人遂驗得、其機妙類如レ此、今之言レ畫者、咸取レ則焉《寫す所の古人の眞、及び、山水草木等、皆、自生するがごとし。昔、宮中に在り、或る人をして從者をして喚ばしむ。或る人、辭するに、未だ顏容を見ざるを以つてす。河成、卽ち、一紙を取りて、其の形體を圖す。或る人、遂に驗し得たり。その機妙、類ね、此くのごとし。今、畫を言ふ者は、咸くに、則を取る。》とあるので知れる。これに似た話、五雜俎七に、相傳、戴文進至二金陵一、行李爲二一傭肩去一、查不レ可レ識、乃從二酒家一借二紙筆一、圖二其狀貌一、集二衆傭一示レ之、衆曰是某人也、隨至二其家一、得二行李一焉《相ひ傳ふ、『戴文進、金陵に至るに、行李、一の傭に肩ひ去られて、查として識るべからず。乃ち、酒家より紙筆を借り、その狀貌を圖し、衆くの傭を集めて、之れを示すに、衆、曰はく、「是れ、某人なり。」と。隨つて、その家に至るに、行李を得たり。』と》。戴文進は明朝の初の人だから、河成が死んでより五百年も後の人だ。

［やぶちゃん注：「鄉研一の五〇と一六六頁」「選集」によれば、前者は『鄉土研究』第一

巻五十ページから収載されてある赤峯太郎の論文「今昔物語集の研究」であり、後者は同巻の第三号の百六十六ページから収載されてある南方熊楠の論文「川成と飛驒の工の技を競べし話」である旨が編者割注で示されてある。私は「南方熊楠全集」を所持しないが、幸いにして、サイト「私設万葉文庫」にある電子テクスト（底本は平凡社「南方熊楠全集」第三巻（雑誌論考Ⅰ）一九七一年刊で新字新仮名）で読むことが出来る。さらに、頗る面白いので指摘しておくと、そこに明治四一（一九〇八）年六月発行の『早稲田文学』三十一号に発表した「『大日本時代史』に載する古話三則」の「増補」パートに、恐らくは、その前文の附記クレジット『昭和二年九月三十日記』と同じ時に追加したと思われる文章で、以下がある。**引用元では、「世説新語」からの引用で、表記不能字が『？』で示されているのであるが、それは所持する明治書院の新釈漢文大系の「世説新語」で確認し（巧芸篇第二十一の「4」話目）、漢字を入れておいた。**他は引用元の表記のママであるが、読みはルビ化した。

＊

およそ『今昔物語』本朝部に載せたる古話に、インドと支那より転訛せるもの多し。その二四巻、百済河成飛驒匠と芸競べの条は、『世説新語』に出る。いわく、魏の鍾会かつて詐りて荀勗［やぶちゃん注：「じゅんきょく」。］の手書を作り、勗の母に就いて宝剣を取り去る。会まさに宅を造る、勗潜かに在って会の祖父の形を壁に画く。会の兄弟、門に入り、これをみて感慟し、すなわちその宅を廃す、と。インドにも、南天竺の画師が北天竺の巧師を訪うと、無類の美女が出て給侍した。夜分もその側に侍せるを呼んでも一向近づかず、前（すす）んで牽くと木造りの女だった。そこで。画師はおのれが頸縊った壁画を作り、牀下に隠れおると、明朝主人の巧師見て大いに怖れ、刀で縄を絶たんとする時、画師が牀下より出たので、二人おのおのの妙技に感じ、親愛をすて出家修道した、と『雑譬喩経』四にある。これだけ予見出だして『郷土研究』一巻三号一六六頁に載せた。また、川成が従童を逃がし、その顔を畳紙に画いて下部に渡すと、市の群集中よりたちまちその童を認め捉え来たという記事の類話として、明の戴文進のことを同巻九号五五一頁に出した。

右いずれも予に無断で、故芳賀博士の『攷証今昔物語集』に、自分の発見のように転載されおる。［やぶちゃん注：以下略。］

＊

そこで、熊楠が憤懣をぶつけているのは芳賀矢一の「攷証今昔物語集　下」で、大正一〇（一九二一）年刊であった。芳賀は、熊楠がこの「増補」を行った年の二月に没している。**国文学の権威者であった芳賀が、南方熊楠の過去の類話考証論文から、無断で、自分の本に類型原拠を載せたのである。ここだ！　こりゃ、もう、厚顔無恥のレベルだね。偉い奴が他**

**人の功績を奪い取って、平然としているのは、今も変わらないな。**

「文徳實録」正式には「日本文徳天皇實録」。藤原基経らの編。「六国史」の第五で、文徳天皇の代である嘉祥三（八五〇）年から天安二（八五八）年までの八年間が扱われている。編年体。漢文。全十巻。以上は国立国会図書館デジタルコレクションの宝永六（一七〇九）年の出雲寺和泉掾板行の版では、ここ（左丁後ろから三行目の最後）から記されてある。

「五雑俎」「五雑組」とも表記する。明の謝肇淛（しゃちょうせい）が撰した歴史考証を含む随筆。全十六巻（天部二巻・地部二巻・人部四巻・物部四巻・事部四巻）。書名は元は古い楽府題で、それに「各種の彩りを以って布を織る」という自在な対象と考証の比喩の意を掛けた。主たる部分は筆者の読書の心得であるが、国事や歴史の考証も多く含む。一六一六年に刻本されたが、本文で、遼東の女真が、後日、明の災いになるであろう、という見解を記していたため、清代になって中国では閲覧が禁じられてしまい、中華民国になってやっと復刻されて一般に読まれるようになるという数奇な経緯を持つ。」

［やぶちゃん注：以下は本篇の「一」の「巻第四　震旦國王前阿竭陀藥來語第三十二」の考証に対する追加記事である。元が雑誌『郷土研究』所収のものを一括再録したものであることから、こうした形を採っている。底本ではここ。当該原話は『「南方隨筆」版　南方熊楠「牛王の名義と烏の俗信」　オリジナル注附　「一」の（1）』の私の注にあるので、そちらを参照されたい。］

○震旦國王前ニ阿竭陀藥來ル語第（一の三六四頁）に追加す。本語に、「國王阿竭陀藥と聞き給て。其藥は服する人死ぬる事无かなり。皷に塗て打つに、其音を聞く人皆病を失ふ事疑ひ无しと聞く」。此事は予未だ出處を見出し得ぬ。但し似た事は有る。北凉譯大般涅槃經九に、有人、以ニ雜毒藥一、用塗ニ大鼓一、於大衆中、擊レ之發レ聲、雖レ無ニ心欲レ聞一聞レ之皆死《人、有り、雜（もろもろ）の毒藥を以つて、用ひて、太鼓に塗り、大衆の中に於いて、之れを擊ちて、聲を發せば、聞かんと欲する心、無しと雖も、之れを聞けば、皆、死す。》と見ゆ。又姚秦（えうしん）頃譯せしてふ無明羅刹經に、折叱王が疫鬼を平げに往く出立を記して、以ニ阿伽陀藥一遍塗ニ身體一《阿伽陀藥を以つて遍く身體に塗る》と有る、此の藥は通常樹葉に包まれ居たと見えて、蕭齊（しやうせい）の朝に譯せる百喩經下の末に、編者僧伽斯那此經を譬へて、如ニ阿伽陀藥一、樹葉而裹レ之、取藥塗レ毒竟、樹葉還棄レ之、戲笑如レ葉裹、實義在ニ其中一、智者取ニ正義一、戲笑便應レ棄《阿伽陀藥のごときは、樹の葉にて之れを裹（つつ）む。藥を取りて、毒に塗り、竟（をは）らば、樹の葉は、還（ま）た、之れを棄つ。戲笑は、葉の裹むがごとく、實義は、其の中にあり。智者は正義を取り、戲笑は、便ち應に棄（す）つべし。》と有る、是等の文に據

ると、最初専ら毒を防ぎ毒を解く藥だうたのが追々誇大して、何様(どんな)な病人でも此藥を見せたら忽ち治ると持囃され（華嚴）、其から鼓に塗て打つ音聞いても病が去ると信ぜられたらしい。似た例を一二擧んに、本草綱目に、鼯鼠(むささび)を一に飛生鳥と名ける譯は、此物飛乍ら子を產むからだ、其皮毛を臨產の婦女に持せ、又其上に寢せ、又其爪を懷かせても催生

［やぶちゃん注：即効性の意。「選集」では『はやめ』とルビする。］の效有ると見え居る、實は子に乳を飲せ乍ら飛行(とびゆく)を見て、飛つゝ子を產むと速斷したのだ、斯る信念は、今に熊野の山地にも存し、二年前拙妻姙娠中、予安堵峰で鼯鼠を獲、肉を拔き去り持歸つた。皮を室の壁へ懸置いた處へ山民が來て、是は怪しからぬ事をする、此物は見ても催生の力が烈しい、臨月でも無い姙婦が毎々見ると流產すると話され、大に氣味惡く成り棄てて了ふた。又熊野や十津川の深山大樹に寓生する蔦の實は、血を清むるので、血道に大効有ると云ふのみか、眺むる斗りでも婦女を無病にする由で、微い［やぶちゃん注：「ちいさい」。］小屋住居にさへ栽られ居る。

［やぶちゃん注：「（一の三六四頁）」「一」の分が載った『鄕土研究』のページ数。

「本語に」「ほんこと」にと読んでおく。

「死ぬる事无かなり」後半は「なかんなり」。一般的でなかった「ん」の無表記で、「死ぬ危険は全くありません」の意。

「皷」「鼓(つづみ)」」に同じ。

「此事は予未だ出處を見出し得ぬ」現在でも出典は不詳のようである。

「姚秦」「えうしん」（ようしん）。五胡十六国時代に羌族の族長姚萇によって建てられた後秦（三八四年～四一七年の別名。先行する統一国家秦と区別するための呼称。

「蕭齊」「しやうせい」（しょうせい）。南北朝時代に江南に存在した方の斉（四七九年～五〇二年）を、先行する春秋戦国の一国である「齊」と区別するための呼称。

「僧伽斯那」一般に「僧」を名に繫げて「そうぎやしな」と読まれる。

「戯笑」一部の経典にあるような、半ばふざけたように見える方便の経説のことを指すか。

「本草網目に、鼯鼠を一に飛生鳥と名ける」**李時珍は大分類に於いてさえ、「獸」でも「鼠」でもなく、巻四十八のまさに「禽之二」に入れている（一度は正しく「獸」部に入れたものもあったのに、わざわざ配置換えをしていて致命的）。**「漢籍リポジトリ」のこちらの[112-50a]から[112-50b]を見られたい。ムササビは「鼯鼠」（ルイソ）という名で立項されてあるが、「鼯鼠」の表記も既にあげられてあり、**「釋名」の最後に、その「飛生鳥」を認める。そうして、「發明」の箇所に、確かに、あった。「時珍曰、鼯能飛而、且產。故、寢其皮懷其爪、皆、能催生。其性、相感也。濟生方治、難產、金液丸用、其腹下毛。爲丸服之。」がそれだ。**寺島良安も本書に倣って「原禽類」に分類してしまい、この異名と、「飛びながら出

産する」の部分を引いてはいる。私の「和漢三才圖會第四十二　原禽類　鷽鼠（むささび・ももか）　（ムササビ・モモンガ）」を参照されたい。但し、良安はどこかでこの鳥の仲間とする分類法に、深く疑問を持っていたようで、「第三十九　鼠類」にも、盛んにムササビらしき動物が、複数回、顔を出している。

「安堵峰」『「南方隨筆」版　南方熊楠「龍燈に就て」　オリジナル注附　「二」』の私の注を参照。地図をリンクさせてある。

「皮を室の壁へ懸置いた處へ山民が來て、是は怪しからぬ事をする、此物は見ても催生の力が烈しい、臨月でも無い姙婦が毎々見ると流産すると話され、大に氣味惡く成り棄てて了ふた」熊楠先生の優しさがちらっと見えて、ええ感じやな❤

「蔦」「選集」では『やしお』とルビするが、この読みを聴いたことがなく、また、検索でも掛かってこない。更に、木蔦の特定種を指すのかどうかも判らなかったので、ここで注するに留める。]

[やぶちゃん注：熊楠が採り上げた当該話はこちらで電子化訳注してあるので、まず、それを読まれたい。底本ではここから。]

○金翅鳥子免修羅難語第十《金翅鳥の子、修羅の難を免れたる語》」（巻三、第十）芳賀博士の纂訂本一九三頁に、私聚百因縁集より少しく異文の同話を擧げた斗りで、出處も類語も載せず、予も此語の出處を見出し得ぬが、同態の類語が、姚秦竺佛念譯、菩薩處胎經四に出でたるを知る。云く、佛、智積菩薩の問に對ふらく、吾昔一時無央數劫、爲二金翅鳥王一云々、於二百千萬劫時一、乃入レ海求レ龍爲レ食、時彼海中有二化生龍子一、八日、十四日、十五日、受二如來齋八禁戒法一、不殺レ不レ盜不レ婬不二妄言綺語一不レ勸レ飲レ酒不レ聽レ作二倡伎樂香花脂粉高廣床一、非時不レ食。奉二持賢聖八法一、時金翅鳥王、身長八千由旬、左右翅各各長四千由旬、大海縱廣三百三十六萬里、金翅鳥以レ翅斫レ水取レ龍、水未レ合頃、銜レ龍飛出、金翅鳥法、欲レ食レ龍時、先從レ尾而呑、到二須彌山北一、有二大緣鐵樹一、高十六萬里、銜レ龍至レ彼、欲二得レ食噉一、求二龍尾一、不レ知處、以經二日夜一、明日龍出尾、語二金翅鳥一、化生龍者我身是也、我不レ持二八關齋法一者、汝卽灰二滅我一、金翅鳥聞レ之悔過自責《『吾れ、昔、一時、無央數劫に、金翅鳥王と爲る』云々、『百千萬劫の時に、乃ち、海に入りて龍を求め、食と爲す。時に、彼の海中に化生せる龍の子あり。八日・十四日・十五日に、如來の八つの禁戒を齋する法を受く。殺さず、盜まず、婬せず、妄言綺語せず、酒を飲まず、倡伎の樂と香花と脂粉と、高く廣き床を作すを聽かず、非時に食せず、賢聖の八法を奉持す。時に、金翅鳥王は、身の長け八千由旬［やぶちゃん注：一由旬は説に幅があり、七〜

十四・五キロメートル。]、左右の金翅、各各長さ四千由旬、大海は縦廣三百三十六萬里なり。金翅鳥は、翅を以つて、水を斫り、龍を取るに、水、未だ合はざる頃ひに、龍を銜へて、飛び出づ。金翅鳥の法は、龍を食らはんとする時、先づ、尾よりして呑み、須彌山の北に到るに、大鐵樹、有りて、高さ十六萬里。龍を銜へ、彼に至りて、食ひ得て、噉はんと欲するも、龍の尾を求むるに、知れざる處、以つて日夜を經たり。明日、龍、尾を出し、金翅鳥に語はく、「化生せる龍は、我が身、是れなり。我れ、八關の齋法を持せざれば、汝、即ち、我れを、灰滅せしならん。」と。金翅鳥、之れを聞きて、過ちを悔ひて自責す。』と。》、夫より鳥王其宮殿に化生龍を請じ、八關齊法［やぶちゃん注：「はつかいさいはふ」。］を受け、誓ふて自後殺生せなんだと有る。中阿含經に見えた聖八支齊は則ち八關で、佛教の初生時代には尤も信徒間に重んじ行はれた者だ、大智度論に、六齊日に八戒を受け、福德を修むる譯は、是日惡鬼逐レ人、欲レ奪二人命一、疾病凶衰、令二人不吉一、是故劫初聖人、教二人持齋一、修レ善作レ福、以避二凶衰一、是時齋法、不レ受二八戒一、直以二一日不食一爲レ齋、後佛出世、教語レ之言。汝當上一日一夜如二諸佛一持二八戒一過レ中不レ食上、是功德將レ人至二涅槃一《是の日、惡鬼、人を逐ひ、人命を奪はんと欲し、疾病・凶衰もて、人をして不吉ならしむ。是の故に、劫初の聖人は、人に齋を持するを教へ、善を修め、福を作し、以つて凶衰を避けしむ。是の時の齋法は、八戒を受けずして、直だ、一日、食らはざるを以つて齋と爲す。後、佛、出世し、教へて之れを語りて言はく、「汝、當に、一日一夜は、諸佛のごとく八戒を持し、中を過ぎて食はざるべし。」と。是の功德、人を將つて涅槃に至らしむ》と有る、然るに佛教支那に入て後、この八關齊は如法［やぶちゃん注：「によほふ」。仏陀の教えた教法の通りであること。］に行はれず、自分の戒行を慎み修めて涅槃を願ふよりも、死人の追善を重んじ、四十九日の佛事を專ら營む事と成たので、八關齊を七七日の施に切替へ、龍と金翅鳥を（類似重複の話が經中に多きを厭ひ）金翅鳥と阿修羅王と作たのだらう。釋氏要覽に、瑜伽論曰、人死中有身、若未レ得二生緣一、極二七日一住、死而復生、如レ是展轉生死、至二七七日一、決定得レ生、若有二生緣一、即不レ定、今尋二經旨一極善惡無二中有一、（極善即惡生淨土、極惡惡即二地獄一）今人亡、毎七日營亡毎至七日。必營齋追福者、令二中有種子不一レ轉二生惡趣一也《人、死して中有の身ありて、若し未だ生緣を得ざれば、七日を極りとして住し、死して、復た、生く。是くのごとく、展轉として、生死し、七七日に至りて決定して生を得。若し生緣有れば、即ち、定まらず。今、經旨を尋ぬるに、極善惡の者は、中有、無し（極善は、即ち、淨土に生まれ、極惡は、即ち、地獄に生まる。）。今、人、亡じて七日毎に齋を營み、追福するは、中有の種子をして惡趣に轉生せざらしむるものなり。》とあるを見ても、七七日の佛事と云ふ事は、後世佛教徒間に起つた事らしい。

［やぶちゃん注：ここでの経典引用は、表記だけでなく、各部分からに合成部が甚だ多く、特に後の「釋氏要覽」からのそれは、原文中に丸括弧で挿入されるのを見ても不審が判る通り、切り張りが甚だしく、「大蔵経データベース」から、すっきり原文を抜き取ることが出来なかった。どう切り張りしたかもよく判らない箇所多かった（或いは正規の同書原本とは異なる抄録本を引用元に用いているのかも知れぬ）ため、やむを得ず、部分的に底本に従った箇所がある。但し、「齋」の字については、経典部分では「大蔵経データベース」に従い、「齋」を用い、熊楠の語る部分では、底本表記を重んじて、「齊」の字で表記した。なお、今さら言うまでもないとは思うのだが、若い読者のために注しておくと、「齋」＝「齊」＝「斎」は仏教語の和訓では「とき」と読み、「時」とも書き、僧侶の本来の午前中の一度きりの食事を指す。今や誰も実行している本邦の僧侶はいないと思うが、本来、仏僧は一日に午前中に一食しか食事を摂ることは許されないのである。しかし、現実的に、それだけでは、身が持たず、修行も滞るばかりか、栄養失調になって話にならないことから、非常に古くから、午後に非公式の食事を摂ることが許された。それを正しくない摂餌として心に戒めるために「非時」と呼ぶのである（現代では、そんなことを心にとめておる僧は、これまた、おるまいが）。なお、僧侶に布施として捧げる食物や物品・金銭を広く「斎料（ときりょう）」とも呼ぶ。

「第十」私の電子化訳注を見ればお判り戴ける通り、実際には、岩波「新日本古典文学大系」の底本「東大甲本」では話柄の数の番号が欠落している。但し、順列通りで欠損がないとすれば、「第十」である。

「芳賀博士の纂訂本一九三頁に、私聚百因縁集より少しく異文の同話を擧げた斗りで、出處も類語も載せず」ここ。「私聚百因縁集（しじゅひゃくいんねんしふ）」は鎌倉前期の説話集。正嘉元（一二五七）年に当時四十八歳であった常陸国の浄土教の僧愚勧住信著。全九巻百四十七話。仏法の正しさを説話によって示し、衆生に極楽往生を遂げさせる機縁とすることを目的として著わされたもの。仏教の歴史に関する説話・高僧の伝記などが多いが、その総てが諸書からの引用で、その中でも特に「今昔物語集」の影響が著しく、他に「日本往生極楽記」や「発心集」の引用が目立つ。直接の関係は見られないが、親鸞布教前後の東国の浄土教の広まりを知る貴重な資料とされる。しかし、芳賀の引用を見ても判る通り、これは殆んど本篇に基づいて引用したに過ぎず、概ね、後代の本書に基づく類話や、甚だ怪しい類話でさえない話を挙げて「攷証」を書名に冠して満足している芳賀のそれは、今時の大学生でも出来てしまう頗る羊頭狗肉のつまらぬ論証が多過ぎる。私には南方熊楠の激しい苛立ちがよく判る。

「姚秦」「えうしん」（ようしん）。五胡十六国時代に羌族の族長姚萇によって建てられた

後秦（三八四年〜四一七年の別名。先行する統一国家秦と区別するための呼称。

「八關齊法」「八斎戒」に同じ。インド仏教の戒律。在家信者が一昼夜の間だけ守ると誓って受けるところの八つの戒律。則ち、㊀生物を殺さない。㊁他人のものを盗まない。㊂嘘をつかない。㊃酒を飲まない。㊄性行為をしない。㊅午後は食事をとらない。㊆花飾りや香料を身に附けず、歌舞音曲等を見たり聞いたりしない。㊇地上に敷いた床のみで寝て、脚の高立派な寝台を用いない、という八戒で、主に原始仏教と部派仏教で行われた。一般に在家信者は一ヶ月に六回、日の出とともに、この戒を受けて、翌朝の日の出までそれを守った。そこから「一日戒（いちじつかい）」とも称した。在家信者の、所謂、「精進日」で、出家者に準じた在家信者の修行の一つであった。

「中有」衆生が死んでから次の縁を得るまでの間を指す「四有（しう）」の一つである。通常は、輪廻に於いて、無限に生死を繰り返す生存の状態を四つに分け、衆生の生を受ける瞬間を「生有（しょうう）」、死の刹那を「死有」、「生有」と「死有」の生まれてから死ぬまでの身を「本有」とする。「中有」は「中陰」とも呼ぶ。この七七日（しちしちにち・ななぬか：四十九日に同じ）が、その「中有」に当てられ、中国で作られた偽経に基づく「十王信仰」（具体な諸地獄の区分・様態と亡者の徹底した審判制度。但し、後者は寧ろ総ての亡者を救いとるための多審制度として評価出来る）では、この中陰の期間中に閻魔王他の十王による審判を受け、生前の罪が悉く裁かれるとされた。罪が重ければ、相当の地獄に落とされるが、遺族が中陰法要を七日目ごとに行って、追善の功徳を故人に廻向すると、微罪は赦されるとされ、これは本邦でも最も広く多くの宗派で受け入れられた思想である。恐らく、若い読者がこの語を知ることの多い契機は、芥川龍之介の「藪の中」の「巫女の口を借りたる死靈の物語」の中で、であろう。リンク先は私の古層の電子化物で、私の高校教師時代の授業案をブラッシュ・アップした『やぶちゃんの「藪の中」殺人事件公判記録』も別立てである。私は好んで本作を授業で採り上げた。されば、懐かしい元教え子もあるであろう。]

[やぶちゃん注：熊楠が採り上げた当該話はこちらで電子化訳注してあるので、まず、それを読まれたい。底本ではここ。]

○王宮焼不歎比丘語《王宮焼（わうぐう）くるに歎かざりし比丘の語［やぶちゃん注：頭の「天竺」（天竺の）が脱落している。］》（巻五第十五）芳賀博士の今昔物語集の四二九頁に、此語の出處、類話一切出て居無（をらな）い。予も出處を知らぬが、類話を、趙宋の初め智覺禪師が集めた宗鏡錄巻六四より見出した。此書は今昔物語の作者てふ源隆國の薨去より先づ百廿年前

に成た。其文は、諸苦所レ困、貪欲爲レ本、若貪心瞥起、爲二五欲之火焚燒一、覺意纔生、被二三界之輪繫縛、如二帝釋與脩羅戰勝一、造二得勝堂一、七寶樓觀、莊嚴奇特云々、天福如之妙力能如レ此、目連飛往、帝釋將二目連一看堂、諸天女皆羞二目連一、悉隱逃不レ出、目連念、帝釋著樂、不レ修二道本一、卽變二化火一、燒二得勝堂一、爀然崩壞、仍爲二帝釋一廣二說無常一、帝釋歡喜、後堂儼然、無二灰煙色一《『諸苦、困しむ所のものは、貪欲を本と爲すなり。若し、貪心、瞥して［やぶちゃん注：ちょっとでも。］起こらば、五欲の火に焚き燒かれ、覺意［やぶちゃん注：ここはそれに触れることで生じてしまう悪しき意識を指す。］、纔かに生じて、三界の輪に繫縛せらる。如へば、「帝釋、修羅との戰ひに勝ち、勝堂を造り得て、七寶の樓觀、莊嚴、奇特たり」』云々、『「天福、之くのごとく、妙力、能く此くのごとくあらんも、目連、飛び往くに、帝釋、目連を將ゐて堂を看せしむに、諸天女、皆、目連に羞ぢ、悉く、隱れ逃れて、出でず。目連、念ふに、「帝釋は樂しみに著れ、道の本を修めず。」と。卽ち、火に變化し、得勝堂を燒き、爀然として崩壞せり。仍りて、帝釋が爲めに、無常を廣く說けり。帝釋、歡喜したり。後、堂、儼然としてあり、灰煙の色、無し。」となり』。》と云ので、多分四阿含抔の中に出た語と思ふが、多忙故今一寸見出し得ぬ。

［やぶちゃん注：「趙宋」宋（ここは北宋）に同じ。この呼称は王室の姓に基づくもの。

「智覺禪師」永明延寿（九〇四年～九七六年）は五代十国の呉越から北宋創建初期に生きた法眼宗（中国の禅宗五宗の一つ）の僧。諡は宗照大師。杭州余杭県出身。「教禅一致」を説いた。なお、北宋は五代最後の王朝後周を九六〇年に滅ぼして成立した。その後、残っていた十国の国々も平定し、最後に北漢を九七九年に滅ぼして中国を統一しているので、熊楠の言う「宋の初め」というのは正しい（次注の成立年を見よ）。雪峰義存の弟子翠巌令参の下で出家し、天台徳韶の嗣法となった禅僧。

「宗鏡錄」現行では「すぎょうろく」（現代仮名遣）と読む。仏教論書。全百巻。九六一年成立。延寿の主著で、当該ウィキによれば、『禅をはじめとして、唯識宗・華厳宗・天台宗の各宗派の主体となる著作より、その要文を抜粋しながら、各宗の学僧によって相互に質疑応答を展開させ、最終的には「心宗」によってその統合をはかるという構成になっている』。『この総合化の姿勢は』『後世になって、「禅浄双修」「教禅一致」が提唱された時』、『注目されることとなった』とある。

「帝釋、修羅との戰ひに勝ち」帝釈天が阿修羅と戦ったという話はしばしば仏典に現われる。ウィキの「阿修羅」によれば、『阿修羅は帝釈天に歯向かった悪鬼神と一般的に認識されているが、阿修羅はもともと天界の神であった。阿修羅が天界から追われて修羅界を形成したのには次のような逸話がある』。『阿修羅は正義を司る神といわれ、帝釈天は力を

司る神といわれる』。『阿修羅の一族は、帝釈天が主である忉利天（とうりてん、三十三天ともいう）に住んでいた。また』、『阿修羅には舎脂という娘がおり、いずれ』、『帝釈天に嫁がせたいと思っていた。しかし、その帝釈天は舎脂を力ずくで奪った（誘拐して凌辱したともいわれる）。それを怒った阿修羅が帝釈天に戦いを挑むことになった』。『帝釈天は配下の四天王などや三十三天の軍勢も遣わせて応戦した。戦いは常に帝釈天側が優勢であったが、ある時、阿修羅の軍が優勢となり、帝釈天が後退していたところ』、『蟻の行列にさしかかり、蟻を踏み殺してしまわないようにという帝釈天の慈悲心から』、後退している『軍を止めた。それを見た阿修羅は』、『驚いて、帝釈天の計略があるかもしれないという疑念を抱き、撤退したという』。『一説では、この話が天部で広まって』、『阿修羅が追われることになったといわれる。また』、『一説では、阿修羅は正義ではあるが、舎脂が帝釈天の正式な夫人となっていたのに、戦いを挑むうち』、『赦す心を失ってしまった。つまり、たとえ正義であっても、それに固執し続けると』、『善心を見失い妄執の悪となる。このことから』、『仏教では天界を追われ』、『人間界と餓鬼界の間に修羅界が加えられたともいわれる』とある。ここでは、阿修羅側ではなく、逆に帝釈天の奢りが描かれていて、面白い。私は、無論、阿修羅が好きである。遠い昔、教え子に案内されて見た興福寺の阿修羅像には、甚だ心動かされたのを思い出す。

「四阿含」四種の「阿含経（あごんきょう）」を指す。「長阿含経」（全二十二巻）・「中阿含経」（全六十巻）・「増一阿含経」（全五十一巻）・「雑阿含経」（全五十巻）の総称。原始仏教の経典を四部に分類したもので、仏教の系統としては、北方系の分類法に属す。南方系では五部に分ける。「大蔵経データベース」の検索で、ちょっとやりかけてみたが、熊楠ではないが、対象が膨大に過ぎ、語句での絞り込みも上手く出来なかったので、中途でやめた。」

［やぶちゃん注：熊楠が採り上げた当該話は五年前に、「柴田宵曲　續妖異博物館　馬にされる話」の私の注の中で、全文を電子化し、簡単な語注を本文内に挟んである（今回、その部分のみを、再度校訂し、正字不全や、語注を追加しておいた）にので、まず、それを読まれたい。また、**その宵曲の当該作自体が、恐らくは本論に対して有益な情報をも与えてくれる内容でもあろうからして、全文を読まれんことを強くお勧めする。**参考底本ではここから。なお、本パートはやや長いので、「選集」の段落分けに従って四段落とし、以下に全部を示した。各段落の後に注を附し、その後は一行空けた。］

○通二四國邊地一僧行三不レ知所一、被二打成一レ馬語《四國の邊地を通りし僧、知らぬ所に行きて、馬に打ち成さるる語》（巻卅一、第十四、本誌一巻五〇頁参照）人を馬にする談は

諸國に多く、一八八七年板「クラウストン」の俗話小説之移化卷一の四一三至四六〇頁に夥しく亞細亞歐羅巴の諸傳を列ね居るが、亞非利加にも其例有るは、一八五三年板「パーキンス」の亞比西尼亞住記卷二、章三三に其證いづ。亞比西尼亞では、「ブーダ」と呼で、鍛工(かぢや)が自分をも他人をも獸に化する力有りとす、著者が遇た人々親しく、片足は人、片足は驢蹄(ろてい)の婦人を觀たと云ふ。此婦死して埋めた墓邊へ一人來たり、僧を語ひ其屍を購(あがな)ひ、掘出し持去た、將來(これまで)死人の家の門を過(よぎり)て市へ往く鍛工が、此頃から驢(ろば)に乘て往く事と成たが、其驢が此家を過り、又家の子供を見ると高聲を發し近づき來らんとする、子なる一人何と無く、此は自分の母だらうと思付き、人をも驢をも執(とら)へると、驢、涙を流し、子に鼻を擦付る。色々鞫問(きくもん)すると鍛工終(つひ)に白狀したは、此婦を魔法で死人同樣にし、扨(さて)埋後購ひ去て驢に化したと、其なら本へ復したら罪を赦すと約して、魔法で漸々(やうやう)本へ復し、片足丈驢蹄だつた時、鬱憤爆發して其子が鍛工を槍(つ)き殺したので、その母一生一足驢蹄で終つたと云ふ。

［やぶちゃん注：「本誌一卷五〇頁」初出誌である『鄕土研究』の論文収載部の指示。「選集」に編者による『前出赤峯論文』という割注があるが、ここを指す

『一八八七年板「クラウストン」の俗話小説之移化卷一の四一三至四六〇頁』「選集」には書名に『ポピュラル・テイルス・エンド・フイクションズ』というルビが振られてある。これはイギリスの民俗学者ウィリアム・アレキサンダー・クラウストン（William Alexander Clouston　一八四三年～一八九六年）の‘*Popular Tales and Fictions*’（「人気の高い譚と通俗小説」）。「Internet archive」のここから原本当該部が視認出来る（パート標題は‘MAGICAL TRANSFORMATIONS’（「魔術的変容」）。

『一八五三年板「パーキンス」の亞比西尼亞住記』「選集」には同前で『ライフ・イン・アビシニア』というルビが振られてある。「アビシニア」はエチオピアの別名。これはイギリスの上流階級の出身で旅行家であったマンスフィールド・ハリー・イシャム・パーキンス（Mansfield Harry Isham Parkyns　一八二三年～一八九四年）が書いた最も知られたエチオピア紀行（一八四三年から一八四六年まで滞在）‘*Life in Abyssinia*’の初版。「Internet archive」のこちらからが当該部。ど真ん中に「ブーダ」（Bouda）と出る。

「驢蹄」。驢馬(ろば)（ロバ）の蹄(ひづめ)。

「購ひ」「選集」は『購(か)い』と訓じている。

「將來」「これまで」の読みは、「選集」に従った。

「人をも驢をも執へる」「人」は乗っていた鍛冶屋を指す。

「鞫問」厳しく問い糺すこと。「詰問」に同じ。

「埋後」「まいご」と読んでおくが、あまり聴かないな。］

嬉遊笑覽十二に、「四國を巡りて猿と成ると云ふ諺は、風來が放屁論に、今童謠に、一つ長屋の佐次兵衞殿、四國を廻りて猿と成るんの、二人の伴衆は歸れども、お猿の身なれば置て來たんのと云り、其頃云初しには有可らず。諺は本より有しにや。扨此諺は誤ならむ、四國猿と云事より移りしか、舊本今昔物語に、通二四國邊地一僧行二不レ知所一、被二打成一レ馬語有り、奇異雜談に、丹波奥郡に人を馬に成て賣し事、又越中にて人馬に成たるに、尊勝陀羅尼の奇特にて助かりし事抔見ゆ、皆昔物語よりいひ出し事なり。されば此諺久しき事と知らる。後人、これを猿といひかへたりと思はる。又按るに搜神記に、蜀中西南高山之上、有物與猴相類。長七尺、能作人行、善走。名猴、猳。一名馬化、或曰玃、伺道人、有後者、輒盜取以去云々。取レ女去而共爲室家、其無子者終身不得還、十年之後形皆類之《蜀中の西南、高山の上に、物、有り、「猴」と相ひ類す。長け七尺、能く、人の行を作し、善く、走る。「猳」と名づけ、一つ、「馬化」とも名づく。或いは「玃猨」とも曰ふ云々。女を取り去つて、共に室家を爲（な）す。其の子無きは、終身、還るを得ず、十年の後、形、皆、之れに類す。》と有り、是抔より出たる事か知るべからず。猴に類すと云へば、猴の形に似つかはしく、又馬化ともいふ名をひがめて［やぶちゃん注：底本（左ページ六行目）は「曲めては」。変更理由は次の注を参照。］は、馬ともいふべくや」と有る。

［やぶちゃん注：「嬉遊笑覽」国学者喜多村信節（天明三（一七八三）年～安政三（一八五六）年）の代表作。諸書から江戸の風俗習慣や歌舞音曲などを中心に社会全般の記事を集めて二十八項目に分類叙述した十二巻付録一巻からなる随筆で、文政一三（一八三〇）年の成立。岩波文庫版（筆者自筆本底本）で全巻を所持するが、漢字が新字なので、国立国会図書館デジタルコレクションのこちらの昭和七（一九三二）年成光館出版部刊（上下二冊の「下」）の当該部を比較視認して校訂し、さらに、**「搜神記」は上記二冊の孰れもが複数個所で不審があるため（私は高校生の時以来、同書を偏愛している愛読者である）、「中國哲學書電子化計劃」の影印本（ここの最終行から次のページにかけて）で一部（異名の漢字が二冊とも受け入れ難いおかしなもであった）表記を正した。**熊楠の引用も表記が熊楠の好みで書き換えられている箇所が多いため、結果して、**南方熊楠の引用表現の一部を改めることとなったが、これは正規の正当な表現に限りなく近づけるための仕儀であり、批判される筋合いは全くないと信ずるものである。**なお、ここで喜多村が引いている、「奇異雜談集」（これが正しい書名）のそれ、「丹波の奥の郡に人を馬になして賣し事」は、「柴田宵曲　續妖異博物館　馬にされる話」の私の注の中で電子化してある。

「風來が放屁論」これは風来山人（かの平賀源内の号の一つ）の書いた戯文。江戸両国橋

で人気のあった昔語花咲男という曲屁芸人を論評するという形をとって、当時の閉塞した身分制社会を批判したもの。安永三（一七七四）年刊。

「猴」「玃」などは、私の「和漢三才圖會　卷第四十　寓類　恠類」を参照されたい。」

諸國の人を馬や驢と作（なし）た話に就て、此方法を按ずるに、或は魔力有る藥料を身に塗付たり、（アプレユス金驢篇、西暦二世紀作、卷三）、或は魔力有る飲食を與へたり、（奇異雜談上、一八章、コラン、ド、プランシー妖怪事彙一八四五年板二八頁クラウストン上出）或は手綱や轡を加へるのだ（クラウストン同上、グベルナチス動物譚原一八七二年板卷一、三四二頁）。就れも［やぶちゃん注：「孰れも」の誤字か。］斯くして畜と成れた後で、鞭笞苦困（べんちくこん）［やぶちゃん注：鞭打たれて苦役されること。］さるるが、此今昔物語の一條のみ、笞を以て打ち据て、引起こすと馬に成（なつ）て居（をる）と有るは、此物語の特色と見える。但し高木君は幻異志の板橋三娘子の譚が此語の本源たる事疑ひ無しと言れたが、それに果たして笞で打て驢と作すと有りや、予も幻異志を見た事が有るが、十九年前の事故、一向記憶せぬ、如（も）し笞で打て驢と作すと有らば、此話の本源たる事疑ひ無きも、其事無くば、單に類話と云ふべきのみ。高木君は本文を出さぬ故詳を知る能はざるも、其叙する所を見ると、件の幻異志中の譚は、「クラウストン」一卷九七頁に引た羅馬の俗話と同源の物に非ざるか。

［やぶちゃん注：「アプレユス金驢篇、西暦二世紀作、卷三」「選集」では書名に『デ・アシノ・アウレオ』と振る。北アフリカ・マダウロス出身の帝政ローマの弁論作家ルキウス・アプレイウス（Lucius Apuleius　一二三年頃～？：奇想天外な小説や極端に技巧的な弁論文によって名声を博した）の代表作である「変容（又は黄金の驢馬（ロバ）（*Metamorphoses sive Asinus Aureus*）は、彼のウィキによれば、『魔術に興味を抱いた主人公ルキウスが誤ってロバに変えられ、数多の不思議な試練に堪えた後、イシスの密儀によって再び人間に復帰するという一種の教養小説』で、ローマ時代の小説のうち、完全に現存する唯一のものである、とある。

「奇異雜談上、一八章」これはその類別から、明らかに先の「喜遊笑覧」のそれを差しているとしか私には思えない。但し、「奇異雜談集」は、上下巻はなく、第一巻の第一話から数えると第三巻のそれは十六話目ではある。

「コラン、ド、プランシー妖怪事彙一八四五年板、二八頁」「選集」には書名に『ジクシヨネール・アンフエルナル』というルビが振られてある。フランスの文筆家コラン・ド・プランシー（J. Collin de Plancy　一七九四年或いは一七九三年～一八八一年或いは一八八七年）が一八一八年に刊行した*'The Dictionnaire infernal'*（「地獄の辞典」）。

「グベルナチス動物譚原一八七二年板、一巻三四二頁」同前で『ゾーロジカル・ミソロジー』とルビされている。イタリアの文献学者コォウト・アンジェロ・デ・グベルナティス（Count Angelo De Gubernatis　一八四〇年〜一九一三年）が書いた Zoological Mythology（「動物に関する神話学」）。本書電子化で複数回既出既注だが、再掲しておくと、イタリアの文献学者コォウト・アンジェロ・デ・グベルナティス（Count Angelo De Gubernatis　一八四〇年〜一九一三年）の「動物に関する神話学」。「Internet archive」の第一巻同年版原本の当該部はここ。

「高木君」ドイツ文学者で神話学者・民俗学者でもあった高木敏雄（明治九（一八七六）年〜大正一一（一九二二）年）。大正二〜三年には、本篇の初出する『郷土研究』を柳田国男とともに編集している。欧米の、特にドイツに於ける方法に依った神話・伝説研究の体系化を試み、先駆的業績を残した。ここで言う論文の収載書誌は不詳（『郷土研究』であろうとは思われる）。私も読みたい。

「幻異志の板橋三娘子の譚」「柴田宵曲　續妖異博物館　馬にされる話」を参照。

「如し笞で打て驢と作すと有らば、此話の本源たる事疑ひ無きも、其事無くば、單に類話と云ふべきのみ」私はてっきりこれが典拠と思っていたが、言われてみると、確かにそんなシーンはないので、類話かなぁ。

『「クラウストン」一巻九七頁に引た羅馬の俗話』先の“*Popular Tales and Fictions*”の第一巻であるが、**「Internet archive」の一八八七年板（先に熊楠が挙げたものと同年）で調べたところ、この長いローマの物語は、熊楠の指示したページよりももっと前の、この「93」ページから「98」ページまでがそれであることが判明した。**

言く貧人の二子、林中で大鳥が卵を落したるを拾ふと字を書付有る、庄屋に見せると、「吾頭を食ふ者帝たらん、吾心臓を食ふ者金常に乏しからじ」と有る。庄屋自身頭も心臓も食んと思ひ、二人に、是は此鳥を食ふと旨いと書て居る、だから強な棒を準備して、彼鳥を俟受けて殺せと命ず、斯て翌日二人其鳥を殺し、庄屋を待受て食はんと炙る内、鳥の頭が火の中へ落た、焦た物を庄屋に呈るべきで無いと思ひ、弟が拾ふて食ふて了ふ、次に心臓が火の中へ落て焦たから、兄が食て了ふ、所へ庄屋が來て、大に失望して怒り散して去る、父に話すと斯る上は他國へ出よと云ふので、二人宛もなく旅立つ、其から毎夜旅舎で睡ると、兄の枕の下に金が出て來る、弟其金を持て兄より前に都に入ると、丁度國王が死んで嗣王を擁立する所だつたが、金の光で［やぶちゃん注：金のお蔭で。］此弟が忽ち王と立てられた、斯とも知らず、兄も都に入て、母と娘二人暮しの家に宿ると、例の如く枕の下から金が毎夜出る、娘此男を賺

して事實を知り、
吐劑を酒に入れて飲せて、彼鳥の心臓を吐出さしめ、男を追出す、詮方無くて川畔に歎き居ると、仙女三人現れ愍んで、手を探る毎に金を出す袂有る衣を吳る、男愚かにも其金で餽り物を求め、復た彼家へ往く。娘諜して［やぶちゃん注：さりげなく探りを入れて。］其出處を知り、僞衣を作り、男が睡つた間に掏り替へる、明旦起出て其奸を知れども及ばず、復た河畔に往くと、仙女來て、案を打ば何でも出る棒を吳る、復た娘の宅へ往き竊まれる、例により例の川邊で、何でも望の叶ふ指環を貰ふ、是が最終だから、取れぬ樣注意せよと言れたが、懲ずに娘の宅に往き問落される、娘言く、そんなら吾等二人向ふの山へ飛往き、鱈腹珍味を飲食せうと望んで見なさいな、依て男其通り、環に向て望むと忽ち望み叶ふ、此時娘、酒に麻藥を入て男を昏睡せしめ、指環を盗み、自宅へ還らうと望むと、忽ち還り去る。男眼覺て大に弱り、三日泣き續けて夥しく腹空る故、無鐵砲に手近く生た草を食ふと、即座に驢身に化し、兩傍に二籃懸れり、心丈は確かで、其草を採て籃に容れ、麓迄下りて其處な草を拔くと、忽ち人身に復つた、因て其草をも籃に入れ、姿を替て彼娘の宅前に往き、莱を買はぬかと呼ぶ、娘菜は大好で、其草を執て嘗みると［やぶちゃん注：「嘗みると」は「選集」は『こころみると』であるが、私は「なめ（て）みると」と読む。］、便ち驢形に變ず、男之を打ち追て街を通る、其打樣が餘り酷い故、町人之を捕へ王に訴出る、男其王を見ると骨肉の弟だから、乞て人を退け事由を談る。其處で王命じて驢化した女に兄と俱に宅に歸て、從來盗んだ物を悉く返さしめ其後靈草を食せよと本の人身に復した。（此項つゞく）

（大正二年鄉研第一卷九號）

［やぶちゃん注：「無鐵砲に手近く生た草を食ふと、即座に驢身に化し、兩傍に二籃懸れり、心丈は確かで、其草を採て籃に容れ」個人的には、自分の背の両側に懸け渡されてしまった二つ籠に、ロバになった彼が、どうやってその籠を外し、草を入れることが出来たのか、そのシーンが私には頭に描けないのだが？　まあ、お伽話だから、目をつぶることと致そうか。

「其處で王命じて驢化した女に兄と俱に宅に歸て、從來盗んだ物を悉く返さしめ其後靈草を食せよと」老婆心乍ら、最後の部分は（私の読みは丸括弧なしで示した）、

＊

「其處で王」（兄弟の弟の方）は、「驢」と「化」した、その性悪「女」に対して、再び再会できた実の「兄と」「俱に」その驢馬女の前に毅然として立ちはだかって、まず、

――「宅」「に歸つて、從來」（今まで）「盗んだ」沢山の「物を」、「悉く」持ち主に「返」

すように――
と厳命した上で、加えて、
――「其後(そののち)」に、この「靈草を食せよ」――
と「命じ」た。

＊

という謂いである。私が最初に読んだ時、たった一ヶ所にしか読点のないこの文にちょっと躓いたので、一言言い添えた。]

## 三

（通四國邊地僧被打成馬語出典考承前）

[やぶちゃん注：熊楠が採り上げた当該話は五年前に、「柴田宵曲　續妖異博物館　馬にされる話」の私の注の中で、全文を電子化し、簡単な語注を本文内に挟んである（今回、その部分のみを、再度校訂し、正字不全や、語注を追加しておいた）にので、まず、それを読まれたい。また、**その宵曲の当該作自体が、恐らくは本論に対して有益な情報をも与えてくれる内容でもあろうからして、全文を読まれんことを強くお勧めする。**参考底本ではここから。なお、本パートはやや長いので、「選集」の段落分けに従って十一段落とし、以下に全部を示した。各段落の後に注を附し、その後は一行空けた。以下の添え辞の「今昔物語集」の標題は私の記事標題が正しく、不全である。読みは「四國の邊地を通りし僧、知らぬ所に行きて、馬に打ち成さるる語」である。**またまた、読みが難しい字が他出するので、以降は最後まで、私が推定で（　）でルビを大幅に入れ、数少ない底本のルビは、《　》で示した。**]

予一切經を通覽せしも、此羅馬俗話其儘の同話又類話は無い、然し前の部分に酷似(よくに)たのと、後の部分に大體似たのが別々に有る、乃(すなは)ち唐の義淨譯根本說一切有部毘奈耶(いうぶびなや)雜事二七に、鞞提醯國の善生王(ぜんしやうわう)の夫人男兒を生む、此兒生れ已(をは)りて國民皆な飲食(おんじき)を得易く成(なつ)た迚、足飲食(すうおんじき)と名く、善生王の後又別に夫人を娶り子を生み、立(たて)て太子とす、足飲食王子住(とど)まれば、必ず誅せらるべしとて、半遮羅國に遯(のが)れ、其王女を娶り男兒を生む、其日國中飲食得易かつたので多足食(たすうじき)と名く。程無く父王子歿しければ、王命により其妃を或る大臣に再嫁し、多足食王子も母に隨て其大臣方に在り、時に、大臣家有レ雞栖宿、相師見已、作二如是語一、若其有レ人、食二此雞一者、當二得爲一レ王、大臣聞已、不レ問二相師

一、便殺二其雞一、謂二其妻一曰、汝可三營レ膳待二我朝還一、夫人卽令二烹煮一、時多足食從二學堂一來、不レ見二其母一、爲二飢所一レ逼、見レ有二沸鐺一、便作二是念一、我母未レ來、暫觀二鐺内一、有レ可レ食不、遂見二雞頭一、卽便截取、以充二小食一、母既來至、問言食未、答曰且食二雞頭一、母卽與レ食、令レ歸二學所一《大臣の家に鶏有りて、栖み宿る。相師［やぶちゃん注：占い師。］、見已りて、是くのごとき語を作す、「若し、其れ、人、有りて、此の鶏を食らへば、當に王と爲るを得べし。」と。大臣、聞き已りて、相師に問はずして、便ち、其の鶏を殺し、其の妻に謂いて曰はく、「汝、膳を營んで、我が朝より還るを待つべし。」と。夫人、卽ち、烹煮せしむ。時に、多足食、學堂より來たりて、其の母を見ず。飢えの逼る所と爲りて、沸ける鐺の有るを見るや、便ち、是れ、念ひを作すに、『我が母、未だ來たらず。暫く鐺の内を觀ん、食ふべきものの、有りや不や。』と。遂に鶏の頭を見、卽ち便ち、截り取りて、以つて小食に充つ。母、既に來たり至り、問ふに、「食せりや、未だしや。」と言ふ。答へて言はく、「且つは、鶏の頭を食せり。」と。母、卽ち、食を與へ、學所に歸らしむ。》、大臣歸り見ると鶏頭無し、妻に問て兒が食て去つたと知る。抑も此の鶏を全で食て王と成得るか、少しく食ふても成れるかと疑ひを成じ、彼相師に問ふと、答ふらく、全身を食ずとも、頭さへ食たら王に成る、若し他人が鶏頭を食たなら、其奴を殺し、其頭を食ふと王に成ると、大臣便ち彼繼子を殺さんとて、妻に夫と子と何れが王に成て欲いかと尋る、妻、お座成に夫の方を望むと答へ、私に子をして其亡父の生國へ逃れしめた、其の途上で、丁度亡父の弟王病死し、群臣嗣王を求むるに出會ひ、此兒人相非凡だから、選ばれて王に成たと有る。

［やぶちゃん注：「鞞提醯」「選集」には『ヴィデハー』とルビする。古代インドのどこかは不詳。

「善生王」**底本は「無生王」。「選集」の表記を「大蔵経データベース」で同経典を確認して訂した。後の同語も、かくした。**

「半遮羅」「選集」には『パンチアーラ』とルビする。同前。

「父王子」原文を見たが、以上のパートはもっと複雑で恐ろしく長い。熊楠はそれを、無理矢理、簡略化しているのである。そのため、判り難いが、ここは逃れた半遮羅国の義父王の嗣子の王子が亡くなったのである。以下、二国の継嗣問題が絡んでいるために実はかなり解読が難しいのだが、私はそのように読んだ。］

一八四五年板「デ・ボデ」男「ルリスタン」及び「アラビスタン」紀行、卷二、頁一八に、「グラニ」人年々鶏の宴を催す、各村の戸主各一鶏を僧方に持集り、大鍋で煮た後、その僧一片づゝ鶏肉を一同へ輪次盛り廻るに、鶏頭を得る者は、其年中、特にアリ聖人の

贔屓を受(うく)るとて欣喜す、此輩又墓上に鷄像を安置し、鷄像を形代(かたしろ)として諸尊者の祠に捧ぐと見ゆ、熊楠謂ふに、古印度の提醯國民も、此波斯(ペルシヤ)のグラニ人も、梵教と回教を信じ乍ら、以前鷄を族靈(トテム)として尊崇した故風を殘存したのであらう。

［やぶちゃん注：「選集」では、以上の段落は全体が一字下げである。確かに、次の段落では

『一八四五年板「デ・ボデ」男「ルリスタン」及び「アラビスタン」紀行』イングランドの男爵クレメント・アウグストゥス・グレゴリ・ピーター・ルイス・ドゥ・ボーデ（Clement Augustus Gregory Peter Louis De Bode, baron　一七七七年～一八四六年）かと思われる。この*'Travels in Luristan and Arabistan'*の作者として知られるだけのようである。「ルリスタン」が現在のイランのロレスターン州：ラテン文字転写：Lorestān)。イランでも古い歴史をもつ地域で、紀元前第三千年紀・第四千年紀に、外から入ってきた人々がザーグロスの山地に住み着いたのが起源とする。位置は当該ウィキの地図を参照されたい。「アラビスタン」は旧アラビスタン首長国。十五世紀から一九二五年まで元「アラブ首長国連邦」であったが、現在はイランの一部。位置は英文ウィキ「Emirate of Arabistan」の地図を参照。**「Internet archive」で原本が見られるが、熊楠の指示したページにはない。「選集」でも同じページだが、今までにも、誤記を見出した経緯があったので、ダメモトでフル・テクストを機械翻訳して調べたところが、図に当たった！　これは「一八〇頁」の誤りであった！　久々に南方熊楠のオリジナル注で快哉を叫んだ！　ご覧あれ！　「180」ページの十一行目に「the *Gúrani*」とあり、「181」の十一行目に「Ali」、十四行目に「アリ聖人」の意らしい「Ali-Iláhi」とあって、ここで熊楠の言っていることが確かに載っている！　「南方熊楠全集」再版本では注して訂すべし！**］

又同書卅に、老娼他の妓輩と賭(かけ)して、女嫌ひの若き商主を墮(お)とさんとて、自分の子も商用で久しく不在也、名も貌も同じき故、吾子同然に思う迚親交す、商主老娼の艶容無雙なるに惚れ、一所に成(なら)んと言出(いひだ)すと、汝の財物悉く我家に入(いれ)たら方(まさ)に汝が心を信ぜんと言ふ、因て悉く財物を運び入れしを、後門より他へ移し去り、酒に醉睡(ゑひねむ)れる商主を薦(こも)に裹んで衢(まち)へ送り出す、大に悲んで日傭(ひやとひ)となり、偶然父の親交有りし長者方に傭はれに之(ゆ)くと、その名を聞(きき)て憐れみ慰め、女婿(ぢよせい)とすべしと云ふ、商主何とか老娼に詐(かた)り取れた財貨を取還した上(うへ)にせんと、暫時婚儀の延期を乞ふ、是時遊方（商主の名）出レ城遊觀、於二大河中一、見下有二死屍一隨流而去上、岸上烏鳥欲レ餐二其肉一、舒レ嘴不レ及、遙望二河邊一、遂以レ爪レ捉、箸揩二拭其嘴一、嘴便長、去食二其死肉一、食レ肉足已、復將二一箸一揩レ嘴、令二縮如レ故無一レ異。遊方見已、取レ箸而歸、遂將二五百金錢一、往二姪女舍一、

報言、賢首、往以二無錢一、縛レ我舁出、今有二錢物一、可レ共二同歡一、女見レ有レ錢、遂便共聚、是時遊方既得二其便一、即將二一箸一揩二彼鼻梁一、其鼻遂出、長十尋許、時家驚怖、總命二諸醫一、令二其救療一、竟無二一人能令一レ依レ舊、醫皆棄去、女見二醫去一、更益驚惶、報二遊方一曰、聖子慈悲、幸忘二舊過一、勿レ念二相負一、爲レ我治レ之、遊方答曰、先當レ立レ誓、我爲レ汝治、先奪二我財一、並相還者、我當二爲療一、答言、若令レ差者、倍更相還、對二衆明二言、敢相欺負、即取二一箸一、揩二彼鼻梁一、平復如レ故、女所レ得物、並出相還、得レ物歸レ家、廣爲二婚會一云々《是の時、遊方（商主の名）、城を出でて遊觀す。大河の中に於いて、死屍、有り、流れに隨ひて去るを見る。岩の上の烏鳥その肉を餐はんと欲し、嘴を舒ぶれども、及ばず。遙かに河邊を望み、遂に爪を以つて箸を捉り、その嘴を揩拭るに、嘴、便ち、長ぶ。去にて其の死肉を食らひ、肉を食らひ、足り已るや、復た、一つの箸を將つて嘴を揩り、縮みて、故のごとく異なること無からしむ。遊方、見已りて、箸を取りて歸る。遂に五百金錢を將つて、姪女の舍に往く。報げて言はく、「賢首、往に、錢無きを以つて我れを縛りて、舁ぎ出だせり。今は、錢物、有り。同じく歡を共にすべし。」と。女、錢あるを見て、遂に、便ち、共に聚む。是の時、遊方、既に其の便を得て、即ち、一つの箸を將て、彼の鼻梁を揩る。其の鼻、遂に出でて、長さ十尋［やぶちゃん注：中国では一尋は八尺。引用本は唐代であるから、一尺は三十一・一センチメートルなので、二メートル四十八・八センチメートルとなる。］許りなり。時に家のもの、驚き怖れ、總ての諸醫に命じて、其れを救療せしむ。竟に、一人も、能く舊に依さしむるもの、無し。醫、皆、棄てて去る。女、醫の去るを見て、更に、益す驚き惶れ、遊方に報げて曰はく、「聖子よ、慈悲もて、幸ひに舊過を忘れ、相ひ負くを念ふ勿かれ、我が爲めに之れを治せよ。」と。遊方、答へて曰はく、「先づ、當に誓ひを立つべくんば、我れ、汝が爲めに治せん。先に、我が財を奪ひしを、並、相ひ還さば、我れ、當に爲めに療ずべし。」と。答へて言ふ、「若し、差えしむれば、倍して、更に相ひ還さん。衆に對し、明言す。敢へて相ひ欺負かんや。」と。即ち、一つの箸を取りて、彼の鼻梁を揩るに、平復して故のごとし。女、得し所の物、並、出だして相ひ還す。物を得て家に歸り、廣く婚會を爲す云々》。

［やぶちゃん注：「同書三〇」は話が前々段落に戻って「根本說一切有部毘奈耶雜事」の第三十巻となる。ここでは、「大蔵経データベース」の当該巻のデータに不審があったので、「漢籍リポジトリ」のそれに切り替えた。このサイトは「本草綱目」の引用でよく使っており、信頼度は私的には非常に高い。］

此二話は、「ラルストン」英譯「シエフネル」西藏說話一九〇六年板八章と十一章に出居るが、唐譯と少く異ふ、唐譯英譯共に趣向凡て羅馬譚に似て居るが、草を食はせて女

を驢にし報復する代りに、鼻を 揩(こすつ) て高くし困らすとし居る。だから高木氏が、此篇の終りに明記を添えられ 度(たい) のは、幻異志には、娘子に草を食はせて驢とする事有りや 否(いなや) で、其が有らば、日本には 存(そん) せぬが、支那には羅馬と同源から出た話が 有(あつ) たと見て 可(よ) い。又前にも 言(いつ) た通り、幻異志に娘子を笞つて驢と 作(な) すと明記有らば、他に此例は無いのだから、此一事が今昔物語の此話が幻異志より出た確證に立つ筈だ。

［やぶちゃん注：『ラルストン」英譯「シエフネル」西藏說話』「西藏說話」に「選集」では『チベタン・テイルス』とルビする。調べたところ、エストニア生まれのドイツの言語学者・チベット学者であったフランツ・アントン・シェイファー（Franz Anton Schiefner 一八一七年～一八七九年）がドイツ語で書いたものを、一八八二年にイギリスのロシア学者で翻訳家でもあったウィリアム・ラルストン・シェッデン-ラルストン（William Ralston Shedden-Ralston　一八二八年～一八八九年）が一八八二年に英訳した“*Tibetan tales*”と思われる。「Internet archive」のこちらで当該版の英訳原本が読める。ちょっと当該章を読むエネルギは、ない。悪しからず。

「幻異志には、娘子に草を食はせて驢とする事有りや否で、其が有らば、日本には存せぬが、支那には羅馬と同源から出た話が有たと見て可い。又前にも言た通り、幻異志に娘子を笞つて驢と作すと明記有らば、他に此例は無いのだから、此一事が今昔物語の此話が幻異志より出た確證に立つ筈だ」今回、再度、「柴田宵曲　續妖異博物館　馬にされる話」に出る「板橋三娘子(はんきようさんじようし)」の話を「河東記」で読み直してみた。すると、まず、**熊楠の言う「草」というのは、ある。驢馬にするのに用いたものは、家の中のミニチュアの畑で、木彫りの牛と人形を使役して生えさせた蕎麦の実を元にした焼餅(シャオビン)だから**である。また、鞭を打って驢馬にするシーンはないが、後半で驢馬にされてしまった三娘子に跨って主人公の李和（彼はその驢馬が三娘子であることを知っている）が驢馬に鞭打って旅をするというシークエンスはある。但し、乗る驢馬に鞭打つのは当たり前だから、熊楠の必要条件には、残念ながら、該当しない（因みに、彼女は最後には不思議な老人が、驢馬の口と鼻との辺りに手をかけて二つに裂くと、彼女がそこから躍り出て、目出度く元の人間に戻り、姿を晦まして、大団円となる）。やはり、かなり親和性の強い類話であることは、最早、間違いない。しかし、では、「今昔物語集」の例の話の原拠と言えるか？　と問われると、やはり、クエスチョン、とせざるを得ない。］

幼時和歌山で老人に聞いた譚に、或人(あるひと) 鼓(つづみ) を天狗とかより授り、之を打つとお姫様の鼻が無性に長くなり、又打變(うちかへ) ると低く成ると 云(いふ) 事 有(あつ) たが、田邊には 知(しら) ぬ 人(ひとがら) 勝だ。和歌山へ 聞合(ききあは) せた上、本誌へ 寄(よす) べし。

［やぶちゃん注：以上の短い段落は、やはり補足的なもので、「選集」では全体が一字下げになっている。なお、この類話は昔話にかなりある。］

草を食(はせ)て人を驢とする話佛經にもあるは、出曜經卷十に、昔有二一僑士一、適二南天竺一、同伴一人、與二彼奢婆羅呪術家女人一交通、其人發意、欲レ還二歸家一、輒化爲レ驢、不レ能レ得レ歸、同伴語曰、我等積年離レ家、吉凶災變永無二消息一、汝意云何、爲レ欲歸不、設欲レ去者可二時莊嚴一、其人報曰、吾無二遠慮一、遭二値惡緣一、與二呪術女人一交通、意適欲レ歸、便化爲レ驢、神識倒錯、天地洞燃爲レ一、不レ知二東西南北一、以レ是故、不レ能レ得レ歸、同伴報曰、汝何愚惑、乃至レ如レ此、此南山頂、有レ草名二遮羅波羅一、其有三人被二呪術鎭壓一者、食二彼藥草一、即還服レ形、其人報曰、不レ識二此草一、知當二如何一、同伴語曰、汝以レ次噉レ草、自當レ遇レ之、其人隨語、如二彼教誡一、設成爲レ驢、即詣二南山一、以レ次噉レ草、還服二人形一、採二取奇珍異寶一、得下與二同伴一安隱歸家上《昔、一りの僑士有り、南天竺に適(ゆ)くに、一人と同伴するに、彼の奢婆羅(じやばら)呪術家［やぶちゃん注：阿修羅を信望する呪術の家系の意か。］の女人と交通(まじは)りたり。其の人、發意(ほち)して、家へ還-歸(かへ)らんと欲すれば、輒(すなは)ち、化(け)して驢(ろば)と爲り、歸るを得る能はず。同伴、語りて曰はく、「我等、積年、家を離れ、吉凶災變(しやうごん)、永く消息無し。汝の意は云何(いかん)、歸らんと欲するや不(いな)や。設(まう)けて去らんと欲さば、時に莊嚴(しやうごん)すべし。」と。其の人、報(こた)へて曰はく、「吾れ、遠き慮(おもんばか)りなく、惡緣に遭(めぐ)り値(あ)ひ、呪術の女人と交-通れり。意、適(たまた)ま歸らんと欲すれば、便ち、化して驢と爲る。神識(どうぜん)倒錯し、天地、洞然として［やぶちゃん注：すっかり抜けきってしまい。］一つとなり、東西南北を知らず。是の故を以つて、歸るを得る能はず。」と。同伴、報(こた)へて曰はく、「汝、何ぞ愚-惑(おろ)かなること、乃(すなは)ち、此くのごときに至るや。此の南の山の頂きに草有り、『遮羅波羅(じやらばら)』と名づく。其れ、人の呪術に鎭厭(ちんよう)［やぶちゃん注：「鎭圧」に同じ。］せらるる有らば、彼の藥草を食せば、即ち、還(かへ)りて、形(すがた)を服(もど)す。」と。其の人、報へて曰はく、「此の草を識らず。知るには當に如何にすべき。」と。同伴、語りて曰はく、「汝、次(つぎつ)ぎに、以つて、草を噉(くら)はば、自(おのづか)ら之れに遇ふべし。」と。其の人、語(ことば)に隨ひ、彼の教誡のごとく、設(もくろ)み成(な)して、驢と爲り、即ち、南の山に詣(いた)り、次に、以つて、草を噉ひ、還(ま)た、還りて、人の形(すがた)を復(もど)せり。奇珍異寶を採取し、同伴と與(とも)に、安穩に家に歸ることを得たり」》、既に驢に化(かし)た人に復(もど)す草有りと云ふのだから、人に食はせると驢と成す草有りとの信念も行れた筈だ。

［やぶちゃん注：今回は、再び、原文を「大蔵経データベース」をもととした。］

紀州田邊の昔話に、夫婦邪見なる家へ異人來り、祈りて其夫を馬に化す、妻懼れ改過(かいくわ)

［やぶちゃん注：過ちを改めること。］し賴む故、其人復祈り、夫の身體諸部一々人形に復すと、是れ何の據ろ有るを知らずと雖も、外國に似た話有り、例せば、アプレイウスの金驢篇卷十に、「ルシウス」過つて自身に魔藥を塗り、驢に化し見世物に出で、能く持主の語を解するを見て、一貴婦其主に厚く餽り、一夜化驢と交會して歡を盡せしより、更に死刑に當れる惡婦を其驢と衆中で姪せしめんとする話有り。蓋し羅馬が共和國たりし昔、「ラチウム」邊の法、姦婦を驢に乘せ引き廻せし後、其驢をして公衆環視中に其婦を犯さしめたるが、後には多人をして驢に代わらしめ、屢ば其婦死に至つた。其間其人々驢鳴して行刑したとぞ（一八五一年板ヂュフワル遊女史卷一、頁三一四以下）。希臘の古傳に、「クレト」島王「ミノス」神罰を受け、其后「パシプハエ」卒に白牡牛に著し［やぶちゃん注：色情を発し。］、熱情抑え［やぶちゃん注：ママ。］難く、青銅製の牝牛像内に身を潜めて、牡牛の精を受け、怪物ミノタウロス（牛首人身又は人首牛身と云）を生み（グロート希臘史、一八六九年板卷一頁二一四）、埃及の「メンデス」の婦女は神廟附屬の牡山羊に身を施し、以色列の女人亦神牛に身を捨し徵あり（ダンカーヴヰル希臘巧藝の起原精神及進歩、一七八五年板、一卷三二二頁）中世歐州の法に、婦女驢と交るの罪有り、十九世紀にも馬驢牛等と姦し、其畜と俱に燒かれし人多し、（ヂュフワル卷三、頁二七六、卷六、頁一八―二五）近代醫家が實驗せる歐州婦女畜と交れる諸例、孰れも狗のみが共犯者たりと云ふ（ジャクー編内外科新事彙、三九卷、五〇三頁、オット、ストール民群心理學上の性慾論、一九〇八年板、九八三―六頁參照）。

［やぶちゃん注：「アプレイウスの金驢篇」「二」～（5）（ブログへリンク）で既出既注。

「クレト島」クレタ島。

「ミノス」ギリシア神話に登場するクレタ島の王で、冥界の審判官の一人。『クノッソスの都を創設し、宮殿を築いてエーゲ海を支配したとされる』。『ヘロドトスやトゥーキュディデスはミノスを実在の人物と考え、プルタルコスはミノスの子ミノタウロスを怪物ではなく』、『将軍の一人だとする解釈を示している』。『近年、クレタ島のクノッソス宮殿遺跡から世界最古の玉座とともに古文書が見つかり、その碑文の中にミヌテ、ミヌロジャ』『という名前があったことから、ミノス王の実在を示すものではないかと言われている』（より詳しくは引用（名前の中の長音符のあらかたは省略した）元の当該ウィキを参照されたい）。

「パシプハエ」現行では「パーシパエー」と表記することが多い。当該ウィキによれば（名前の中の長音符のあらかたは省略した）、『太陽神ヘリオスとペルセイスの娘で』、『クレタ島の王ミノスの妻とな』った。専ら、『ミノタウロスの母として』『知られる』。『魔術に優れており、また』、『神の血を引くために不死だったとも伝えられている』、『その名の

意味は「すべてに輝く」であり、本来はクレタ島の大地の女神だったと考えられている。ミノスは義父であるクレタ王アステリオスが死んだとき、クレタの王位を要求したが『受け入れられなかった。そこでミノスは王国が神々によって授けられた証に、自分の願いは何でもかなえられると言った。彼は海神ポセイドンに犠牲を捧げ、海から牡牛を出現させることを願い、その牡牛をポセイドンに捧げると誓った。すると願いはかなえられ、海中から』一『頭の美しい牡牛（クレタの牡牛）が現れたので、ミノスは王位を得ることができた。ところがミノスはその牡牛が気に入って自分のものにしてしまい、ポセイドンには別の牡牛を捧げた。ポセイドンは怒って牡牛を凶暴に変え、さらにパーシパエーが』、『この牡牛に強烈な恋心を抱くように仕向けた』とある。また、『別の伝承では』、『愛の女神アプロディーテが、パーシパエーが自分を敬わなかったため、あるいは父であるヘリオス神が軍神アレスとの浮気をヘーパイストスに告げたことを怨んで、パーシパエーをエロスに彼の弓矢で射させ、彼女に牡牛への恋を抱かせたとされる』。『パーシパエーは思いを遂げるため工匠ダイダロスに相談した。するとダイダロスは木で牝牛の像を作り、内側を空洞にし、牝牛の皮を張り付けた。そして像を牧場に運び、パーシパエーを中に入れて牡牛と交わらせた。この結果、パーシパエーは身ごもり、牛の頭を持った怪物ミノタウロスを生んだ』。『ミノスは怒ってダイダロスを牢に入れたが、パーシパエーはダイダロスを救い出してやったともいわれる』とある。

「ミノタウロス」当該ウィキによれば（仕儀は同前）、『ミノタウロスは成長するに』従い、『乱暴になり、手におえなくなる。ミノス王はダイダロスに命じて迷宮（ラビュリントス）を建造し、そこに彼を閉じ込めた。そして、ミノタウロスの食料としてアテナイから』九『年毎に』七『人の少年』と、七『人の少女を送らせることとした。アテナイの英雄テーセウスは』三『度目の生け贄として自ら志願し、ラビュリントスに侵入してミノタウロスを倒した。脱出不可能と言われたラビュリントスだが、ミノス王の娘・アリアドネーからもらった糸玉を使うことで脱出できた』。『ダンテの』「神曲」では、『「地獄篇」に登場し、地獄の第六圏である異端者の地獄においてあらゆる異端者を痛めつける役割を持つ』。『この怪物の起源は、かつてクレタ島で行われた祭りに起源を求めるとする説がある。その祭りの内容は、牛の仮面を被った祭司が舞い踊り、何頭もの牛が辺り一帯を駆け巡るというもので、中でもその牛達の上を少年少女達が飛び越えるというイベントが人気であった。また、古代のクレタ島では実際に人間と牛が交わるという儀式があったとされる』とある。

「ヂユフワル遊女史」「選集」に、『イストワ・ド・ラ・プロスチチユチヨン』とルビする。ピエール・デュフォワール（Pierre Dufour　生没年未詳）の*'Histoire de la prostitution chez tous les peuples du monde : depuis l'antiquité la plus reculée jusqu'à nos jous'*（「世界の総ての人

間世界に於ける売春の歴史：最も遠い古代から我々の時代まで」)。「Internet archive」のこちらでフランス語原本の当該一八五一年版が読める。

「ダンカーヴヰル希臘巧藝の起原精神及進歩」「選集」に、『ルシヤーシユ・スル・デザルト・ド・ラ・グレク』とルビする。作者・書誌ともに調べ得なかった。

「ジャクー編内外科新事彙」「選集」に、『ヌーヴオー・ジクシヨネール・ド・メドシン・エ・ド・シルルジー』とルビする。スイス出身でフランスに帰化した医学者（病理学）フランシス・シギスモンド・ジャクー（François Sigismond Jaccoud　一八三〇年～一九一三年）が一八六四年から一八八六年まで監修し続けた大冊の“*Nouveau dictionnaire de medecine et de chirurgie pratiques*”（「実用医学及び外科新辞典」）。「Internet archive」のこちらで一八六四年初版原本が見られる。

「オット・ストール民群心理學上の性慾論」「選集」に『ガス・ゲシユレヒツレーベン・イン・デル・フオルカープシコロギエ』とルビする。スイスの言語学者・民族学者オットー・ストール（Otto Stoll　一八四九年～一九二二年）が一九〇八年に刊行した“*Das Geschlechtsleben in der Völkerpsychologie*”。]

印度には星占の大家驢唇仙人の出生談が、大方等大集經にも有るが、日藏經の方が較精いから其を引う。卷七に云く、此の賢劫初、膽波城の大三摩王聖主で、常樂一寂靜二云々、不レ樂二愛染一、常樂潔レ身、王有二夫人一、多貪二色欲一、王既不レ幸、無レ處レ遂レ心、曾於二一時一、遊二戲園苑一、獨在二林下一、止息自娯、見二驢合群一、根相出現、欲心發動、脫レ衣就レ之、驢見卽交、遂成二胎藏一、月滿生レ子、頭耳口眼、悉皆似レ驢、唯身類レ人、而復麁澁、駮毛被レ體、與レ畜無レ殊《常に寂靜を樂しみ云々、愛染を樂しまず、常に自ら身を潔くす。王に夫人有り、多く色欲を貪る。王、既に幸せず、心を遂ぐる處、無し。曾つて、一時に於いて、園苑に遊戲し、獨り、林下に在りて、止息し、自ら娯しむ。驢の合まれる群れを見るに、根相、出現す。欲心、發動し、衣を脫ぎて、之れに就けり。驢、見て、卽ち、交わり、遂に胎藏を成す。月、滿ちて、子を生む。頭・耳・口・眼、悉く、皆、驢に似るも、唯だ、身は人に類して、而して復た、麁澁きて、駮の毛、體を被ひ、畜と殊なること、無し。》夫人見て怖れ棄しに、空中に在て墮ちず。驢神と名づくる羅刹婦［やぶちゃん注：女の鬼。］拾ふて雪山に伴行き乳哺す、兒の福力に因り、種々の靈草靈果を生じ、其を食ふて全身復た驢ならず、頗る美男と成たが、唇のみ驢に似たり、苦行上達して天龍鬼神に禮拜された相な。

［やぶちゃん注：今回の校閲は原経が見当たらなかったので、「大蔵経データベース」で語句で検索、最も近い「法苑珠林」（道世撰）のものを参考にしつつ、底本に従った。

「驢唇仙人」「選集」には『クハローチトハ』とルビがある。「佉盧虱吒」（かるしった：現代仮名遣）とも名乗る。サンスクリット語「カローシュティー」の音写。彼は釈迦の前身であるとも言われる。

「膽波」同前で『チヤンパ』とある。ガンジス河の南岸にあった国。玄奘の行った頃は小乗仏教国として記されてある。」

大英博物館宗教部の祕所に、牡牛が裸女を犯す所を彫（ほつ）た石碑が有つた、元と印度で田地の境界に立（たて）た物で、若し一方の持主が、他の地面を取込むと、家婦が此通りの恥辱に逢ふてう警戒（いましめ）ださうな。滅多に見せぬ物だが、予特許を得て、徳川頼倫（よりみち）前田正名（まさな）鎌田榮吉野間口兼雄諸氏に見せた。十誦律六二に、佛比丘が、象牛馬駱駝驢騾（らば）猪羊犬猿猴麞（くじか）鹿鵝雁孔雀鷄等における婬欲罪を判（わか）ち居る、西暦紀元頃「ヴアチヤ」梵士作色神經（ラメイレツス佛譯、一八九一年板、六七―八頁）に根の大小に從ひ、男を兎（うさぎ）特（をうし）駔（をうま）、女を麞（のろ）騜（めうま）象と三等宛に別ち、交互配偶の優劣を論じ居るが、別に畜姦の事見えず。本邦には上古、畜犯すを國津罪の一に算へ、今も外邦と同じく、頑疾の者罕（まれ）に犬を犯すあるを聞けど、根岸鎮衛の耳袋初卷に、信州の人牝馬と語ひし由出せる外に、大畜を犯せし者有るを聞ず、或書に人身御供に立ちたる素女（きむすめ）を、馬頭神來り享（うけ）、終りて其女水に化せし由記したれど、其本據確かならず、但し人が獣裝を成（なし）て姦を行ふ事は、羅馬のネロ帝を首（はじ）め其例乏しからぬ、（ジユフワル卷二、頁三二二。十誦律卷五六。「ルヴユー・シアンチフヰク」、一八八二年一月十四日號に載せたる「ラカツサニユ」動物罪惡論三八頁）要するに、吾國に婦女が牛馬等と姦せし證左らしき者無ければ偶ま夫の根馬の大（おほき）さで常住せん事を願ひし話有りとも、本邦固有の者で無く、外より傳へたか、突然作り出したかだらう。

［やぶちゃん注：「徳川頼倫」以下の人名注を附けるほど私は愚かなお人好しではない。悪しからず。

「元と印度で田地の境界に立（たて）た物で、若し一方の持主が、他の地面を取込むと、家婦が此通りの恥辱に逢ふてう警戒（いましめ）ださうな」これとかなり似た境界碑の民俗資料を（日本ではなく中国か台湾の孰れかであったように記憶する）確かに読んだことがあるのだが、今すぐには思い出せない。発見次第、追記する。

「騾」♂のロバと♀のウマの交雑種である家畜奇蹄目ウマ科ウマ属ラバ *Equus asinus* × *Equus caballus*。その他の組み合わせが気になる方は、「和漢三才圖會卷第三十七　畜類　騾（ら）　（ラバ／他にケッティ）」の私の注を参照されたい。

「麞」鯨偶蹄目反芻亜目シカ科オジロジカ亜科ノロジカ族キバノロ属キバノロ *Hydropotes*

*inermis*。朝鮮半島及び中国の長江流域の、アシの茂みや低木地帯に棲息する、小型のシカ。詳しくは私の「和漢三才圖會卷第三十八　獸類　麞（くじか・みどり）　（キバノロ）」を参照。

「色神經」「選集」には『カマ・ストラ』とルビする。古代インドの性愛書「カーマスートラ」（「スートラ」は「経」の意）。四世紀頃のバラモンの学者バーツヤーヤナの作と伝えられる。性愛に関する事項をサンスクリットの韻文で記し、文学的価値も高い。「愛経」とも訳す。

「根岸鎮衝の耳袋初巻に、信州の人牝馬と語ひし由出せる」私のブログ版「耳嚢　大陰の人因果の事　≪R指定≫」を読まれたい。

「ルヴユー・シアンチフヰク」雑誌名だが、不詳。

「ラカツサニユ」不詳。]

鈴木正三の因果物語下の三に、參州の僧伯樂を業としたが、病で馬の行ひし、馬桶で水飲み、四足に立抔して狂死せりと出づ、畜化狂とも言うべき精神病で（洋名リカンツロピー）、他人に化せられざりしと、身體の變ぜず、精神と動作のみ馬と成た點が、今昔物語の話と差ふ。若し見る人々の精神も偕に錯亂したなら、此人身體迄も馬に化したと見えるかも知れぬ。然る時は今昔物語の話を實際に現出する筈だ。故に這般の［やぶちゃん注：これらの。］諸話を全然無實と笑卻く可きで無い。因果物語中の卅三にも、馬に辛かうた者が、馬の眞似して煩ふた例三つ迄出し居る。歐州に狼化狂多く、北亞非利加に斑狼狂多く、今も日本に狐憑き多き如く、寛永頃馬を扱ふ事繁かつた世には、馬化狂が多かつたんだ。又同物語、下一六に、死後馬と生れし二人の例を列ぬ。是は變化ならで轉生だ。佛典に例頗る多いが、一つを載んに、佛教嫌ひの梵志［やぶちゃん注：バラモン僧。］、豫て沙門が人の信施を食ひ乍ら精進せぬと、死で牛馬に生れ、曾て受た布施を償ふと聞き、五百牛馬を得る積りで、五百僧を請じ、食を供へる、其中に一羅漢有り、神通力で其趣向を知り、諸僧に食後專心各一偈を說しめ、扨梵志に向ひ、最早布施を皆濟したと言たので、大に驚き悟道したと、經律異相卷四十に出ちよる。

［やぶちゃん注：「鈴木正三の因果物語下の三に、參州の僧伯樂を業としたが、病で馬の行ひし、馬桶で水飲み、四足に立抔して狂死せりと出づ」鈴木正三（天正七（一五七九）年～明暦元（一六五五）年：江戸初期の曹洞僧で仮名草子作家。俗名の諱では「まさみつ」と訓じている。元は徳川家に仕えた旗本で、本姓は穂積氏）が生前に書き留めていた怪異譚の聞書を、没後に弟子たち（記名では義雲と雲歩撰とする）が寛文元（一六六一）年に出版したもの。江戸初期の怪奇談集として優れたもので、何時か電子化注をしたいと思っ

ている。「愛知芸術文化センター愛知県図書館」の「貴重本和本デジタルライブラリー」の一括PDF版の「64」コマ目の終りから視認出来る。初版原本だが、極めて読み易い。標題は「生ながら牛と成（なる）僧付」。後の「付けたり」の話の最後に、「寛永十六年の春、不圖（ふと）、煩付（わづらひつき）て、百日程、馬（むま）の真似して、雑水（ざうみづ）を馬桶（むまをけ）に入（いれ）て呑（のま）せ、即ち厩（むまや）に入て置（をく）に、四足（よつあし）に立（たち）て、足掻（あしかき）して、狂（くるひ）、力、強（つよく）、氣色怖布（けしきをそろしく）なり、卅八歳にて死にけり」と終っており、以下で熊楠が、「寛永頃」（一六二四年から一六四四年までで、家光の治世）と語っているのは、この記載に拠ったものであると考えられる。

「リカンツロピー」lycanthropy。ライキャンスォロフィー。狼狂・狼憑き。ギリシア語（ラテン文字転写）「lykos」（狼）と「anthrōpos」（人間）の合成語。

「變化」「選集」では『メタモルフオシス』とルビする。初出誌のルビかと思われる。

「轉生」同前で『トランスミグレーション』とルビする。」

歐州にも馬化狂がある。九年前の「ノーツ、エンド、キーリス」に據（よる）と、葡萄牙に「ロビシヨメ」とて、若い男女形貌枯槁し、長生せず、夜毎に馬形を現じ、曙光出る迄休み無く山谷を走り廻る、夜中彼が村を走り過（すぐ）る音を聞く土民、十字を畫く眞似し、「神ロビシヨメを愍（あは）れみ祐（たす）けよ」と言ふ。之を救ふ法は唯一つ、勇進して其胸を刺し、血を出し遣（や）るのだ。或は言ふ、其人顔青く疲れ果て、形容古怪で、他人之と語らず、怖れ且憐れむ、婦女續けて七男子を生むと、最末子（さいばつし）が魔力に依て「ロビシヨメ」となり、毎土曜日驢形を受け、犬群に追れつゝ沼澤邑里（いうり）を走廻り、些（いささか）も息（やす）み無し、日曜の曙を見て纔かに止む、之を創（つ）くれば永く此患無しと。又言く、同國で狼に化する兒を「ヨビシヨメ」と言ひ、今も地下に住む「モール」人が、嬰兒に新月形（回教徒の徽章）を印し、斯（この）物に作（な）すと。熊楠謂ふに、「ロビシヨメ」「ヨビシヨメ」名近ければ、元或は驢又馬或は狼に化すとしたのが、後に二様に別れたんだらう、之と較（やや）近いのは、同國の俚譚に、王后が馬頭の子でも可（よい）からと、神に祈つて馬頭の太子を產み、後年募（つのり）に應（わう）じ其妻と成（なつ）た貧女の盡力で端正の美男と成たと有る。（一八八二年板、ペドロソ葡萄國俚譚二六章）。誰も知る通り、印度の樂神乾闥婆（けんだつば）は馬頭の神だ（グベルナチス《ゾーロヂカル・ミソロヂー》動物譚原卷一、頁三六七）

（大正二年鄉研第一卷十號）

［やぶちゃん注：「ノーツ、エンド、キーリス」雑誌名。『ノーツ・アンド・クエリーズ』（*Notes and Queries*）。一八四九年（天保十二年相当）にイギリスで創刊された学術雑誌。詳しくは「南方熊楠　本邦に於ける動物崇拜（4：犬）」の私の注を参照されたい。

「ロビシヨメ」lobisomem。但し、現在のポルトガル語では「ロビゾーメーン」で、後の

「ヨビシヨメ」の「狼憑き」を指す語である。

『地下に住む「モール」人』H・G・ウェルズの「タイム・マシン」（*The Time Machine*：一八九五年）に登場する未来世界の地底人モーロック（Morlock）の元となったとされる、旧約聖書に出る「母親の涙と子供達の血に塗れた魔王」とも呼ばれ、人身御供が行われたことで知られる古代の中東で崇拝された神モレク（Molech）の変化したものか。綴りが判らないので調べようがない。

「ペドロソ葡萄國俚譚」ポルトガルの歴史家・民俗学者のゾフィモ・コンシリエーリ・ペドロソ Zófimo Consiglieri Pedroso　一八五一年〜一九一〇年）が一八八二年にロンドンで発行した「ポルトガル民話譚」（*Portuguese Folk-tales*）。「Internet archive」で見つけた（対訳本）。英文の当該箇所はここ（右ページ）から。

「乾闥婆」「選集」では『ガンダールヴァス』とルビを振る。サンスクリット語「ガンダルヴァ」の漢音写で、「食香」「尋香」「香神」などと意訳する。仏法護持の八部衆の一人。帝釈に仕え、香（こう）だけを食し、伎楽を奏する神。「法華経」では観音三十三身の垂迹の一身に数えている。

「グベルナチス動物譚（《ソーロヂカル・ミソロヂー》）原巻一、頁三六七」既出既注だが、再掲しておくと、イタリアの文献学者コォウト・アンジェロ・デ・グベルナティス（Count Angelo De Gubernatis　一八四〇年〜一九一三年）の「動物に関する神話学」（*Zoological Mythology*）。「Internet archive」の第二巻原本の当該部はここ。**但し、決定的な記載は三六九頁の注辺り**であろう。］

## 四

［熊楠が採り上げた当該話はこちらで電子化訳注してあるので、まず、それを読まれたい。底本ではここから。なお、現行の諸本では標題最後の話柄ナンバーは欠落している。ここは底本では返り点が打たれていない。参照した「大蔵経データベース」の画像でも返り点はなく、訓読に難渋した。］

○阿闍世王殺父王語《阿闍世王（あじやせわう）、父の王を殺せる語》（巻三第二七）此話は經律論共に屢ば繰り返された所で、其れ其れ文句が多少異つて居る。芳賀博士の纂訂本二五〇――二頁には、出處として法苑から大智度論と未生怨經と菩薩本行經を孫引きし居るが、孰れも確（しか）と精密に物語の本文と合はぬ。

［やぶちゃん注：芳賀矢一のそれは、ここからで、最後に以上が並べて置いてある。］

予が明治二十八、九年書き拔き置た課餘隨筆と云（いふ）物を搜し出し見ると、物語の前半は

佛說觀無量壽經（劉宋譯）から出たらしい。如是我聞、一時佛在王舍城耆闍崛山中云々《是くのごとく、我れ、聞く、一時、佛、王舍城、耆闍崛山の中に在り云々》。時に王舍大城の太子阿闍世其父を幽す、置於七重室内、制諸群臣、一不得往、國大夫人名韋提希、恭敬大王、澡浴清淨、以酥蜜和麨、用塗其身、諸瓔珞中盛葡萄漿、密以上王、爾時大王、食麨飲漿、求水漱口、漱口云々《七重の室内に置き、諸群臣を制し、一も往くを得ず。國の大夫人、韋提希と名づく。大王を恭敬し、澡浴［やぶちゃん注：体を洗い清めること。］して清淨にし、酥［やぶちゃん注：牛乳から製した食用油。］と蜜を以つて麨に和え、以つて用ひるに、其の身に塗り、諸の瓔珞の中に葡萄の漿を盛り、密かに以つて王に上れり。爾の時、大王、麨を食し、漿を飲む。水を求めて口を漱ぎて云々。》、大目犍連、平生王と親しかりし故、可鷹隼飛疾至王所、日日如是、授王八戒、世尊亦遣富樓那、爲王說法《鷹・隼の飛ぶべく、疾く王の所に至り、日々是くのごとくして、王に八戒を授く。世尊、亦、富樓那を遣はし、王の爲めに法を說く。》三七日［やぶちゃん注：二十一日。］斯くのごとし。王守門者を鞫し子細を聞き、怒て、即執利劍、欲害其母、時有一臣、名曰月光、聰明多智、及與耆婆、爲王作禮、白言大王、臣聞燈昆陀論經說、劫初已來、有諸惡王、貪國位故、殺害其父、一萬八千、未曾聞有無道害母、王今爲此殺逆之事、汚刹利種、臣不忍聞是栴陀羅、我等不宜復住、於此時、二大臣說此語竟、以手按劍、却行而退云々。王聞此語、懺悔求救、即便捨劍、止不害母、勅語内官、閉置深宮、不令復出《即ち、利劍を執り、其の母を害せんとす。時に一の臣有り、名づけて「月光」と曰ふ。聰明多智にして、耆婆［やぶちゃん注：大臣の名前。則ち、ここでは諫言する重臣が二人に分離しているのである。］と共に王の爲めに禮を作し、大王に白して言はく、「臣、『昆陀論』［やぶちゃん注：狭義にはバラモン教の根本聖典で、広義にはウパニシャッド文献も含めたヴェーダ聖典を指す。但し、その経典自体は散佚してない。］の經說を聞くに、劫初已來、諸の惡王有り、國位を貪る故に、其の父を殺害せるは、一萬八千あるも、未だ曾つて、無道に母を害せるもの有るを聞かず。王、今、この殺逆の事を爲さば、刹利［やぶちゃん注：古代インドにおける四姓の一つとして知られるクシャトリアの漢音訳。最高の婆羅門族の次位にして王族及び士族階級を言う。］の種を汚さん。臣、是の旃陀羅［やぶちゃん注：インドで四姓の最下級のスードラ＝首陀羅よりもさらに下の階級であるチャンダーラの漢訳。屠畜・漁猟・獄守などの職業に携わった。所謂、存在自体が穢ていると認識された不可触民のこと。］たらんことを聞くに忍びず。我等、宜しく、復た、住するべからざるなり。」と。時に二大臣、此の語を說き竟れば、手を以つて劍を按じ、卻行りして退く云々、王、此の語を聞きて、懺悔して、救ひを求め、即ち、劍を捨て、止め、母を害せず。内官に勅語し、深宮に閉し置き、復た、出でしめず。》とある。

寶物集には葡萄を蒲桃に作れるが、本草綱目に葡萄一名蒲桃《葡萄、一に蒲桃と名づく。》と有る。芳賀博士が引いた三經よりは、此經の文がずつと善く物語の文に合て居る。なほ此の經の異譯諸本を見たら一層善く合たのも有るだらうが、座右に只今無い故調査が屆かぬ。涅槃部の諸經にも阿闍世王父を害したことが出居るから、其等の中にも有るだらうが、一寸見る譯に行かぬ。

［やぶちゃん注：「課餘隨筆」これ、実は、漢籍などの書名ではなく、南方熊楠自身が、思いついた時に種々の書物から抜書をするための資料ノートの私的な標題であるらしい。されば、以下、経典が引かれているのだが、正確に「佛說觀無量壽經（劉宋譯）」に再度当たったかどうか、甚だ怪しい気がする（特に末尾の断りはそれを深く窺わせる）。返り点がないことからも、これはその過去に於いて熊楠が書写したものがベースである可能性があり、「大蔵経データベース」で、同一であるはずの同経と比べてみても、かなり表記漢字に異同があるのである。個人的には、底本よりも、より確度が高いと判断される「大蔵経データベース」のものを優先した。

「耆婆」大臣の名前。則ち、ここでは諫言する重臣が二人に分離しているのである。

「昆陀論」狭義にはバラモン教の根本聖典で、広義にはウパニシャッド文献も含めたヴェーダ聖典を全体を指す。但し、その最古層の重要だった経典そのものは散佚して、ない。

「刹利」古代インドにおける四姓の一つとして知られるクシャトリアの漢音訳。最高の婆羅門族の次位にして王族及び士族階級を言う。

「旃陀羅」カースト最下級のスードラ＝首陀羅よりも、さらに下の階級とされるチャンダーラの漢訳。屠畜・漁猟・獄守などの職業に携わった。所謂、存在自体が穢ていると認識された不可触民のことを指す。］

扨物語本文の後半の出處として予が書留置たは、北凉曇無讖が詔を奉じて譯した大涅槃經で、その卷十九及二十の文頗る長いから悉く爰に引き得ぬが、此後半話の出處は一向芳賀氏の本に見えぬから大要を述んに、耆婆、王に說て、阿鼻地獄極重之業、以是業緣必受不疑云々。唯願大王速往佛所、除佛世尊、餘無能救、我今愍汝故相勸導《『阿鼻地獄の極重の業、是れを以つて業緣、必ずや受けんことを疑はず』云々、『唯だ、願はくは、大王、速やかに佛所へ往かれんことを。佛世尊を除いて、餘に能く救ふ、無し。我れ、今、汝を愍れむが故、相ひ勸導す』。》といふ。此時、故父王の靈、像無くして、聲のみ、有り、耆婆の勸めに隨ひ佛に詣れと敎へ、王之を聞て大に病み出す。佛之を知つて、入月愛三昧、入三昧已、放大光明、其光清凉、往照王身、身瘡卽愈、欝蒸除滅、王語耆婆言、曾聞人說、劫將欲盡、三月並現、當是之時、一切衆生患苦悉除、時旣未至、此光何來、

照觸吾身瘡苦除愈、身得安樂《月愛三昧に入る。三昧に入り已つて大光明を放つ。その光、清涼にして、往きて王の身を照らす。身の瘡、卽ち、愈え、鬱蒸、除滅す。王、耆婆に語りて言はく、「曾つて人の說くを聞くらく、『劫、將に盡きんとすれば、三つの月、並び現ず。是の時に當たりて、一切衆生の患苦、悉く、除かる。』と。時、旣に、未だ至らざるに、此の光り、何くより來たつて、吾が身を照-燭し、瘡苦、除き愈え、身の安樂を得たるや。」と。》。耆婆、是は佛の光明なりと說き佛に詣るべく勸めると、王言我聞如來、不與惡人同止坐起語言談論、猶如大海不宿死屍云々《王言はく、「我れ、聞く、『如來は、惡人と同じくあるも、坐し、起き、語り、言ひ、談論をば同じく與にはせず。猶ほ、大海の、死屍を宿めざるがごとし。』**[やぶちゃん注：この部分、訓読に自信がない。識者の御教授を乞う。]**と。」云々》。其より耆婆長たらしく諸譬喩を引た後言く、大王世尊亦爾、於一闡提（無佛性の奴）輩、善知根性而爲說法、何以故、若不爲說、一切凡夫當言如來無大慈悲云々《大王、世尊も亦、然り、一の闡提（無佛性の奴［やぶちゃん注：この熊楠の謂いはちょっと大きな誤解を与える。ここは「仏法を謗り、成仏する因を、今現在は持っていない者」を指す。］）の輩に、能く根性を知りて、爲めに法を說く、何を以つての故ぞ。若し、爲めに說かずんば、一切の凡夫、將に言ふべし、『如來には大慈悲なし。』と云々。》とて、如來が良醫の能くいかなる難症をも治する如くなるを言ふ。於是王然らば吉日を撰んで佛に詣でんといふと、耆婆吉日も何も入らぬ、即刻往き玉へと勸む。王便ち夫人と嚴駕車乘《嚴しき駕-車に乘り》、大行列を隨へて佛に詣る。車一萬二千、大象五萬、馬騎十八萬、人民五十八萬、王に隨行したと有る。物語に五萬二千車五百象と有るは、經文が餘りに大層だから、加減して何かの本に出たのを採たのだろ［やぶちゃん注：ママ。］。爾時佛告諸大衆言、一切衆生、爲阿耨多羅三藐三菩提近因緣者、莫先善友、何以故、阿闍世王、若不隨順耆婆語者、來月七日、必定命終墮阿鼻獄、是故近因莫若善友、阿闍世王復於前路聞、舍婆提毘流離王乘船入海遇火而死、瞿伽離比丘生身入地至阿鼻獄、須那刹多作種種惡、到於佛所衆罪得滅、聞是語已、語耆婆言、吾今雖聞如是二語、猶未審定、汝來耆婆、吾欲與汝同載一象、設我當入阿鼻地獄、冀汝捉持、不令我墮、何以故、吾昔曾聞得道之人不入地獄。《爾の時、佛、諸の大衆に告げて言はく、「一切衆生、阿耨多羅三藐三菩提の近き因緣と爲る者は、善友より先なるは莫し。何を以つての故に。阿闍世王、復た耆婆の語に隨順せずんば、未月七日、必定、命、終はり、阿鼻獄に墮ちん。是の故に、近き因は善友に若くは無し。」と。阿闍世王、復た、前路に於いて、聞くらく、「舍婆提の毘瑠璃王は、乘船して、海に入り、火に遇ひて死す。瞿伽離比丘は生身にて、地に入り、阿鼻獄に至る。須那刹多は、種種の惡を作せしに、佛所に到りて、衆罪、滅するを得たり。」と。この語を聞き已りて、耆婆に語りて曰はく、「吾れ、今、是くのごとき

言を聞くと雖も、猶ほ、未だ審かに定せず。汝、來たれ、耆婆よ、吾れ、汝と同じき一象に載らんと欲す。設けて、我れ、當に阿鼻地獄に入るべきならば、冀くは、汝、捉り持つて、我れをして墮ちしめざれ。何を以つての故に。我れ、昔、曾つて、『得道の人、地獄に入らず。』聞けばなり。」と。》其より佛の說法を拜聽し、證果得道した次第を長々と說き有る。

［やぶちゃん注：「月愛三昧」釈迦が、まさにこの阿闍世王の身心の苦悩を除くためにお入りになられた三昧の名。清らかな月の光が青蓮華を開花させ、また、夜道を行く人を照らして歓喜を与えるように、仏が、この三昧に入れば、衆生の煩悩を除いて、善心を増やさせ、迷いの世界にあって、悟りの道を求める行者に歓喜を与えるとされる。

「鬱蒸」もの凄い蒸し暑さ。無間地獄の業火への阿闍世王の懼れが生んだ心身症的なそれであろう。］

［やぶちゃん注：熊楠が採り上げた当該話はこちらで電子化訳注してあるので、まず、それを読まれたい。底本ではここから。］

○歐尙戀父死墓造奄居住語第八《歐尙、死にける父を戀ひ、墓に菴を造りて居住せる語》（卷九第八）予も此語の出處を確かに知ぬが、話中の記事に似た二傳說を淵鑑類函四二九から見出だし置た。乃ち王孚安成記曰、都區寶居父喪、里人格虎、虎匿其廬、寶以簑衣覆藏之、虎以故得免、時負野獸以報、寶由是知名《王孚の「安成記」に曰はく、都區寶、父の喪に居れり。里人、虎を格つ。虎、其の廬に匿る。寶、簑衣を以つてこれを覆ひ藏す。虎、故を以つて免るることを得、時に野獸を負ひて以て報ゆ。寶、これに由りて名を知らる。》と有るのが、甚だ本話に似て居る。又［やぶちゃん注：「又」は熊楠の本文。］晉郭文嘗有虎、忽張口向文、文視其口有横骨、乃以手探去之、虎至明日乃献一鹿于堂前《晉の郭文、嘗つて、虎、有り、忽ち、口を張りて文に向かふ。文、其の口を視るに、横骨、有り。乃ち、手を以つて探り、之れを去る。虎、明日、至りて、乃ち、一の鹿を堂前に献ず。》是は羅馬帝國のアンドロクルスが、獅子の足に立た刺を拔た禮返しに食を受け、後日又其獅子に食るべき罪に中り乍ら、食はれなんだ話に似居るが、虎が鹿を献じただけが今昔物語の此話に似て居る。

［やぶちゃん注：「淵鑑類函」清の康熙帝の勅により張英・王士禎らが完成した類書（百科事典）。一七一〇年成立。「夷堅志」は南宋の洪邁（一一二三年～一二〇二年）が編纂した志怪小説集。一一九八年頃成立。二百六巻。南方熊楠は、この本が結構、好きで、他の論文でもしばしば引用元として挙げている。原文は「漢籍リポジトリ」のこちらを参考に

した。

「安成記」元代の、現在の江西省の年代記。散佚しているが、後代の書に引用が見られる。

「都區」不詳。一種のある地区を管理する下級の者か。

「横骨」摂餌した獣の骨が口蓋内で横に刺さってしまったものであろう。

「アンドロクルス」ローマの奴隷。Bakersfield 氏のブログ「クラバートの樹」の「アンドロクレスとライオン」に、まず、ざっくりと梗概が紹介されており、それによれば、『逃亡奴隷のアンドロクレスが闘技場でライオンの餌食になりかけたとき、ライオンは彼を認識し、抱擁を交わして再会を喜び合った』、『不審に思った皇帝が事情を尋ねると、奴隷はかつてそのライオンの足の棘を抜いてやったことがあるという。ライオンはその恩を忘れずに彼を助けたのである』。『この話に感銘を受けた皇帝はアンドロクレスを赦ゆるし、ライオンともども自由の身にした』とある。**以下、話が細かく語られてあるので（ディグが博物学的で敬服した）、一読をお勧めする。**この皇帝が、かのカリギュラとあって、「ほう！」と思った。また、「イソップ寓話集」の「羊飼いとライオン」でリメイクされてもいるそうである。]

[やぶちゃん注：熊楠が採り上げた当該話はこちらで電子化訳注してあるので、まず、そちらの正規表現原話を読まれたい。珍しく熊楠は原話全体を、相応に、訓読表現で、やや彼風の漢字表記で書き改めて記して紹介している。参考までに、ここでも冒頭にちらと出す南方熊楠がずっと批判してきた芳賀矢一の「攷証今昔物語集」の当該話のテクスト本文をリンクさせておく。底本ではここから。本篇は「今昔物語の研究」の掉尾である。]

○宿驛人隨二遺言一金副二死人一置得レ德語第二十二《宿驛の人、遺言に隨ひて金（こがね）を死にし人に副（そ）へて置きたるに德を得たる語》（巻一〇第二二）此語も芳賀博士は、出處類話共に出して居らぬ。其話は「今昔震旦の□□代に人有て他州へ行く間、日晩て驛と云ふ所に宿しぬ、其所に本より一人宿りして病む、相互に誰人と知る事无（な）し、而るに本より宿して病む人今宿りせる人を呼び語て云く、我れ今夜死むとす、我腰に金二十兩有り、死後必ず我を棺に入れて其金を以て納め置べしと、今宿る人、其姓名生所（せいしよ）を問ひ敢（あ）ざるに、此病人絶入ぬれば、死人の腰を見るに實に金二十兩有り、此人死人の云しに隨て其金を取出して、少分を以て此死人を納め置くべき物の具共を買調へ、其殘りをば約の如く少しも殘さず死人に副（そ）て納めけり、誰人と知ずと雖も如此（かくのごとく）して家に還りぬ。其後、不思懸（おもひかけざる）に主を知ざる馬離れ來れり、此人此れ定て様有むと思て取り繋で飼ふ。而るに、我れ主也と云ふ人無し、其後亦 颰（つむじかぜ） の爲に縫物の衾を卷き持來れり、其れも様有むと思て取り置き

つ。其後ち人來て云く、此馬は我子某と云し人の馬也、亦衾も彼が衾を飈の爲に卷揚げられぬ、既に君が家に馬も衾も共に有り此れ何なる事ぞと、家主答て云く、此の馬は思懸ざるに離れて出來れる也、尋ぬる人無きに依て繫で飼ふ、衾亦飈の爲に卷き持來れる也と、來れる人云く、馬も徒に離れて來れり、衾も飈卷き持來れり、君何なる德か有ると、家主答へて云く、我更に德無し、但し然々の驛に夜宿せりしに、病煩し人、本より宿して絶入にき、而るに彼が云しに隨て彼が腰に有りし金を以て葬り、殘りをば少しをも、殘さず彼に副て納め置て還りにし、其人の姓名生所を知らずと、來れる人此事を聞て地に臥し丸びて泣く事限り無し、云く其死人は我子也、此馬も衾も皆彼が物也、君の彼が遺言を違へざりしに依て、隱れたる德有れば顯れたる驗有て、馬も衾も天の彼が物を給ひたる也と云て、馬も衾も取らずして泣々還るに、家主、馬をも衾をも還し渡しけれども遂に取ずして去にけり。其後此事世に廣く聞え有て、其人直也けりとして世に重く用られけり、此を殆として飈の卷持來れる物をば本の主に還す事無し、亦主も我物と云事も無し、亦卷き持來れる所をも吉き所とも爲す也となむ語り傳へたるとや」（略文）と有る。

此故事から始つたとは附會だらうが、兎に角今昔物語の成た頃の風俗として、暴風が飛し込だ主知れぬ物品を其家主の所得と成しても後日本主が異論を言得ず、隨て其場所を吉相の地としたと見える。

扨此話の出處らしきものを往年控え置たのを、今（三月一日）夜見出たから書付る。後漢書に云ふ、王忳嘗詣京師、於空舍中見一書生疾困、愍而視之、書生謂忳曰、我當到洛陽、而被病、命在須臾、腰下有金十斤、願以相贈、死後乞藏骸骨、未及問姓名而絶、忳卽鬻金一斤、營其殯葬、餘金悉置棺下、人無知者、後歸數年、縣署忳大度亭長、初到之日、有馬馳入亭中而止、其日大風飄一繡被、復墮忳前、忳後乘馬到雒縣、馬遂奔走、牽忳入它舍、主人見之喜曰、今禽盜矣、問忳所由得馬、忳具說其狀、幷及繡被、主人悵然良久乃曰、被隨旋風、與馬俱亡、卿何陰德而致此二物、忳自念、有葬書生事、因說之、幷道書生形貌、及埋金處、主人大驚號曰、是我子也、姓金名彥、前往京師、不知所在、何意卿乃葬之、大恩久不報、天以此章卿德耳、忳悉以被馬還之、彥父不取、又厚遺忳、忳辭讓而去《王忳、嘗つて京師に詣る。空舍の中に於いて、一書生の疾ひに困しむを見いだし、愍れみて、之れを視る。書生、忳に謂いて曰はく、「我れ、當に洛陽に到るべくも、病ひを被り、命は須臾に在り。腰の下に金十斤有り。願はくは、以つて相贈らん、死後に骸骨を藏められんことを乞ふ。」と。未だ姓名を問ふに及ばずして、絶ゆ。忳、卽ち、金一斤を鬻ぎ［やぶちゃん注：売り。］、其の殯葬を營み、餘れる金は、悉く棺の下に置く。人、知る者、無し。後、歸りて、數年、縣は、忳をして大度の亭長［やぶちゃん注：地名かも知れぬが、大きな川の渡し守（地方の下級官吏で地区長）の意で採る。］に署つ。初めて到る

の日、馬、有り、亭中に馳せ入りて止まる。其の日、大風、一の繡被［やぶちゃん注：刺繍を施した衾。通常、着衣の形を成している。］を飄して、復た、忳の前に墮つ。忳、後、馬に乗り、洛縣に至るに、馬、遂に奔走し、忳を牽きて、他の舍に入る。主人、之れを見て、喜びて曰はく、「今、盗を禽へたり。」と。忳に、馬を得たる所由れを問ふ。忳、具に、其の狀を說き、幷に繡被にも及べり。主人、悵然たり［やぶちゃん注：失意の狀態で嘆くさま。］。良久しくして、乃ち曰はく、「被は旋風に隨ひて、馬と俱に亡へり。卿は何の陰德ありてか、此の二物を致せるや。」と。忳、自ら、書生を葬りし事有るを念ひ、因りて之れを說き、幷せて、書生の形貌及び金を埋めし處を道へり。主人、大きに驚き、號びて曰はく、「是れ、我が子なり、姓は金、名は彥、前に京師へ往き、所在を知らず。何ぞ、意はんや、卿、乃ち、之れを葬らんとは。大恩、久しく報ひず、天、此れを以つて、卿の德を彰すのみ。」と。忳、悉く被と馬を以つて之れに還さんとするも、彥の父、取らず、又、厚く、忳に遣るも、忳、辭讓して去れり。》。此話の方が今昔の方より前後善く纏まつて居るが、其を記憶し損ねて今昔の話が出來たのだらう。

（大正三年鄉研第二卷第三號）

**［やぶちゃん注：「漢書」のそれは「卷一百十一」の「獨行列傳第七十一」にある「王忳傳」である。原文対照校訂には「中國哲學書電子化計劃」のこちらから始まる影印本を視認したが、例によって、冒頭・掉尾及び中間部に省略がある上、一部を改変しており、かなり漢字に違いがある。或いは伝版本の違いかも知れぬが、底本よりも影印本を尊重し、改変部及び字の異なるものの内、熊楠のそれより判りが良いと判断したものは、上記リンク先の表字に、原則、改めた（熊楠がカットした部分は、確かに紹介するに必要条件ではないので、復元しなかった）。芳賀矢一の考証ならざるそれを補填して余りある。やったね！　熊楠先生！！！**

「十斤」貨幣単位ではなく、重量。後漢の「一斤」は二百二十二・七三グラムであるから、二・八キログラム弱となる。

「雒縣」洛陽のこと。周代には「洛邑」であったが、後漢になって「雒陽」に改名され、後漢終末期を除いて首都であった。後の魏の時代に「洛陽」に戻されている。

なお、最後の初出記載は、底本では、最終行末の下インデントである。

本篇を以って「今昔物語の研究」は終わっている。数少ないネット上の私の読者に心より御礼申し上げるものである。］